

秋田県文化財調査報告書第197集

# 一ツ森館跡発掘調査報告書

—鹿角市小枝指地区県営一般農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査—

秋田県埋蔵文化財センター

1990・3

秋田県教育委員会

ひと つ もり なで あと  
一 ツ 森 館 跡 発 掘 調 査 報 告 書

——鹿角市小枝指地区県営一般農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査——

1990・3

秋田県教育委員会

## 序

本県には、私達の祖先が営々として築き上げてきた貴重な文化財が数多く残されておりますが、最近の急速な開発事業の進展に伴い、文化財にも開発の波が及んでおります。

秋田県教育委員会では、文化財保護の立場から開発事業側と協議し、銳意その保護に努めております。

本県の基幹産業である農業をとりまく情勢はますます厳しくなり、県農政部では作業の効率化と低コスト化をはかるため、農道基盤整備事業を企画し、鹿角地域でも昭和46年度から農道整備事業を継続しております。

このほど、鹿角市小枝指地区の農道が整備されることになり、事前に計画路線内の埋蔵文化財分布調査で判明している一つ森館跡の発掘調査を工事に先立って実施いたしました。その結果、縄文時代の遺構・遺物、中世の遺物が発見されました。

本書は、この発掘調査の成果をまとめたものであります、埋蔵文化財の保護への御理解と郷土の歴史解明に御活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました県農政部鹿角農林事務所、鹿角市教育委員会、並びに調査及び本書作成に御協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月15日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 順信

## 例　　言

1. 本書は、県農政部鹿角農林事務所の平成元年度小枝指地区県営一般農道整備事業の実施に伴い、遺跡の一部が消滅する鹿角市花輪字一ツ森26番地外に所在する一ツ森館跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で一ツ森館跡として調査した遺跡の範囲は、昭和61（1986）年3月に鹿角市教育委員会が刊行した『館跡航空写真測量調査報告書（5）』に図示されている一ツ森館跡第1郭北半区域である。この館跡に関する史・資料、伝承は皆無であり、館跡の名称は便宜上小字名から附されたものであり、一ツ森の地名は館跡と全く関係ないものに由来している。
3. 現地での調査は、昭和63（1988）年10月18日から10月20日まで実施した範囲確認調査の結果をふまえ、800m<sup>2</sup>の調査予定面積で、平成元（1989）年4月17日から6月9日まで実施した。
4. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行5万分の1「花輪」「田山」「碇ヶ関」「大館」「大葛」「十和田湖」の6図幅と鹿角市発行の2千5百分の1都市計画図である。
5. 遺跡付近の調査前航空写真と、一ツ森館跡関係資料は、鹿角市教育委員会から借用・掲載したものである。
6. 発掘調査で出土した陶磁器片については、佐々木達夫金沢大学文学部助教授に鑑定していただいた。
7. 遺構・埋土等の色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」4版 1973（昭和48）年を使用して表記した。
8. 発掘調査と報告書作成に際し、下記の諸氏から御指導・御教示いただいた。記して謝意を表する。（敬称略、順不同）

秋元信夫　藤井安正　佐藤　樹　馬渕正弘　関　直

# 目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

国版目次

第1章　はじめに	1
第1節　発掘調査に至るまで	1
第2節　調査の組織と構成	4
第2章　遺跡の立地と環境	7
第1節　自然的環境	7
第2節　歴史的環境	9
第3章　発掘調査の概要	17
第1節　遺跡の概観	17
第2節　調査区の設定	23
第3節　調査の経過	25
第4章　調査の記録	26
第1節　検出遺構	26
1　縄文時代	26
(1)　土坑	26
(2)　T-Pit	29
2　中世～近世	29
(1)　柱穴様ピット群	29
(2)　溝状遺構	29
(3)　空洞状遺構	32
第2節　出土遺物	32
1　縄文時代	32
(1)　土器	32
(2)　石器	36

2 中世から近世以降の遺物	36
(1) 陶磁器	36
第5章 まとめ	42

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 範囲確認調査による路線内調査 対象区域	3
第3図 段丘地形図	6
第4図 鹿角地域の中世城館分布図	11・12
第5図 一ツ森館跡周辺小字名と切絵図	18
第6図 一ツ森館跡現況実測図	19・20
第7図 グリッド配置図	24
第8図 遺構配置図	27
第9図 繩文時代の遺構実測図	28
第10図 柱穴様ピット群実測図	30
第11図 下面「帯郭」斜面及び空堀状 遺構内堆積土層断面実測図	31
第12図 出土土器実測図	33
第13図 出土土器拓影図(1)	34
第14図 出土土器拓影図(2)	35
第15図 出土石器・剝片実測図(1)	37
第16図 出土石器実測図(2)	38
第17図 出土石器実測図(3)	39
第18図 出土陶磁器実測図	40
第19図 建設工事設計図	45

## 図 版 目 次

図版1 航空写真	図版8 遺構完掘状況(4)
図版2 遺跡遠景	図版9 出土遺物(1)
図版3 遺跡近景(1)	図版10 出土遺物(2)
図版4 遺跡近景(2)	図版11 出土遺物(3)
図版5 遺構完掘状況(1)	図版12 出土遺物(4)
図版6 遺構完掘状況(2)	図版13 出土遺物(5)
図版7 遺構完掘状況(3)	

# 第1章 はじめに

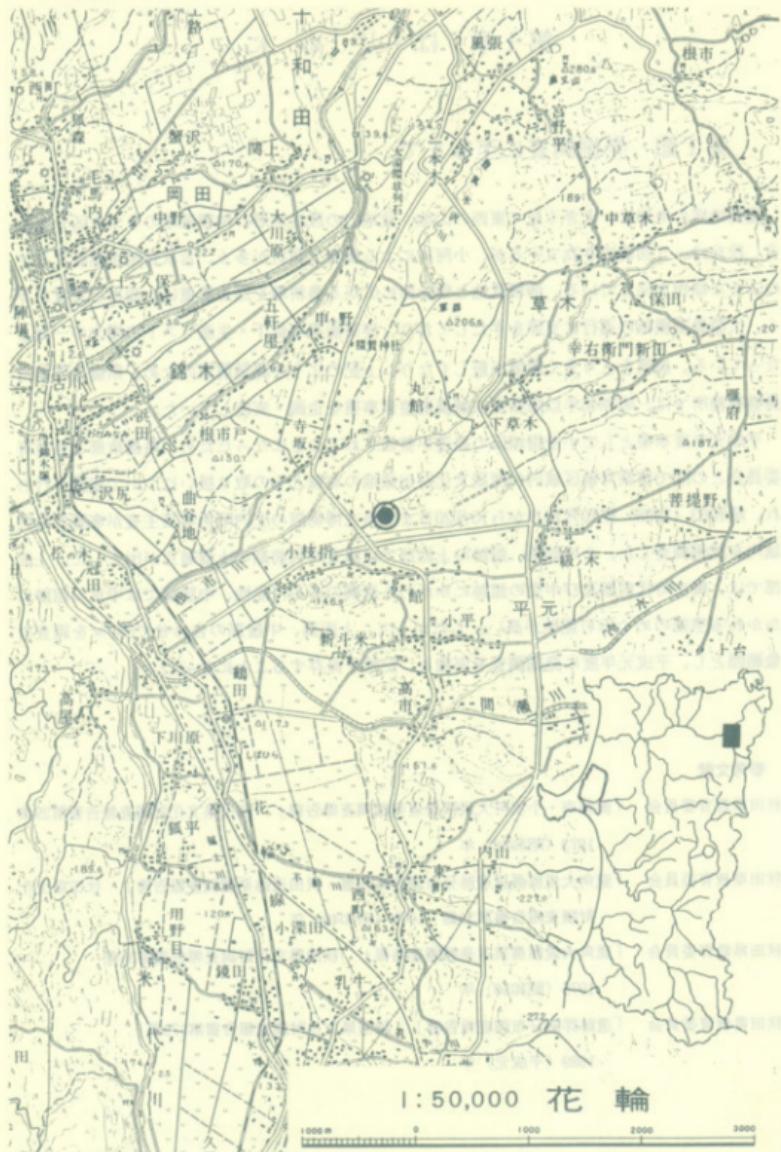
## 第1節 発掘調査に至るまで

鹿角地域の地形は、大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の3つに区分される。段丘は、5面構成されているが、小河川による侵食・開析が多く、舌状台地が連続するかのような様相を呈している。沖積低地と段丘面に広がる農耕地を巡る農道は、曲折と急坂が多く、大型農業機械の通行に支障をきたしており、作業能率の低下・生産コストの増大の一因となっている。農業をとりまく環境が厳しくなり、上記のような課題解消のため、県農政部鹿角農林事務所では、昭和46年以降県営広域農道整備事業を企画・実施していた。

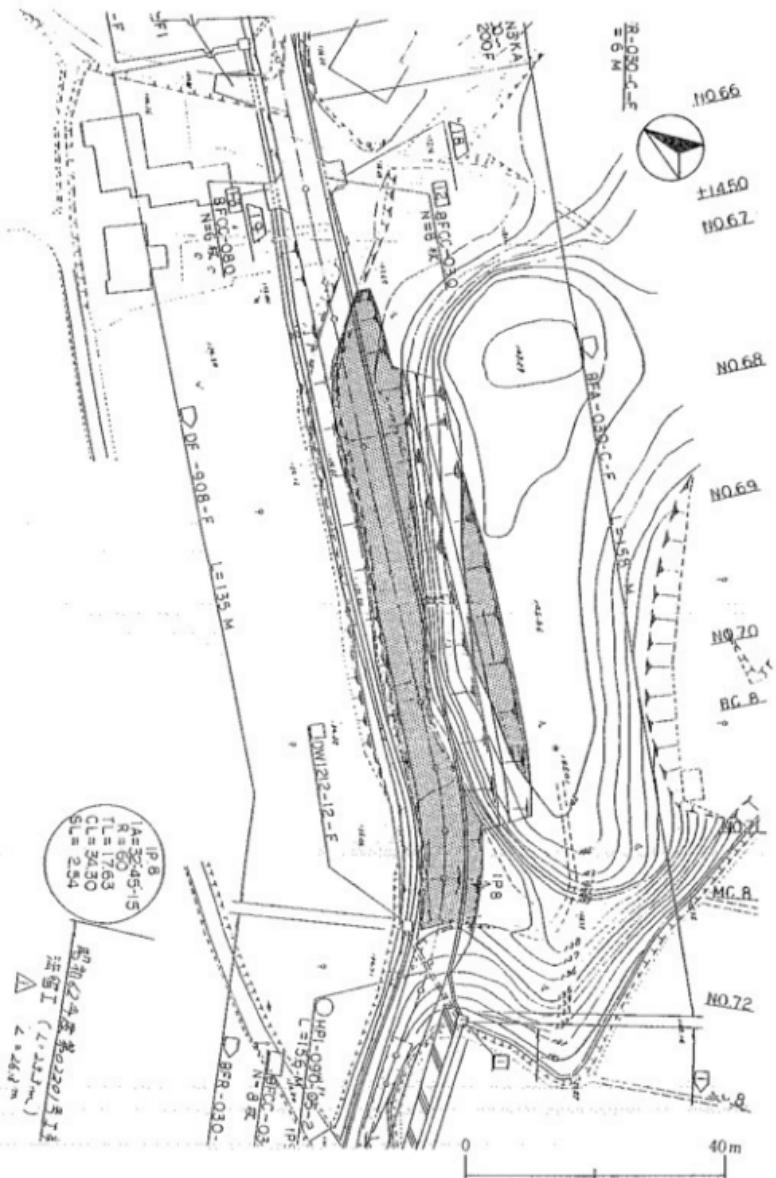
平成元年度事業として小枝指地区の農道が整備されることになったため、県農政部と県教育委員会との間で事業対象区域内の埋蔵文化財包蔵地の有無とその取り扱いについて協議が行われ、昭和63（1988）年10月18日から10月20日まで県立博物館の庄内昭男学芸主査が事業対象区域内を試掘調査した。その結果、館跡の上面部では縄文時代前期の土器破片が出土した。上面部では、縄文時代前期及び中世の館跡にかかる遺構のある可能性、中腹部では中世の館跡にかかる空堀のめぐらしが高い。したがって、上面部、中腹部の合わせて800m<sup>2</sup>を調査対象範囲とし、平成元年度に発掘調査を実施し、記録を保存することになった。

### 参考文献

- 秋田県教育委員会 「鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第29集  
1973（昭和48）年
- 秋田県教育委員会 「鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書・沢田遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第30集 1974（昭和49）年
- 秋田県教育委員会 「鹿角大規模農業道発掘調査略報」 秋田県文化財調査報告書第35集  
1975（昭和50）年
- 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第179集  
1989（平成元）年



第1図 遺跡の位置



第2図 範囲確認調査による路線内調査対象区域

## 第2節 調査の組織と構成

調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	桜 田 隆 秋田県埋蔵文化財センター 文化財主査 藤 原 司 秋田県埋蔵文化財センター 瞄託
事務担当者	佐 田 茂 秋田県埋蔵文化財センター 主査 高橋忠太郎 秋田県埋蔵文化財センター 主事
調査協力機関	県農政部鹿角農林事務所 鹿角市教育委員会

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 自然的環境

秋田県の最北東部に位置する鹿角地域の地形は、巨視的には新第三紀中新世の造構造運動に深い関係をもつ東西の山地、第四紀の十和田火山起源の火山噴出物とその二次堆積物からなる盆地内の段丘地形、東西の山地から流れ出し、合流する河川に沿って広がる沖積低地の3つに区分できる。すなわち「青垣山を巡らす鹿角の地」と詠まれたように、東側を黒森・高井塙山・筑紫森・矢筈山・諸助山・大森・皮投山・五ノ宮巖・鳥谷沢頭などの急峻な奥羽脊梁山地に、西側を大規長根・東殿山・羽保麗山・茂谷山・土筆森・大森山・三ノ岳・鉄鉢森などのややなだらかな高森山地に囲まれた南北に長い盆地地形を呈する。

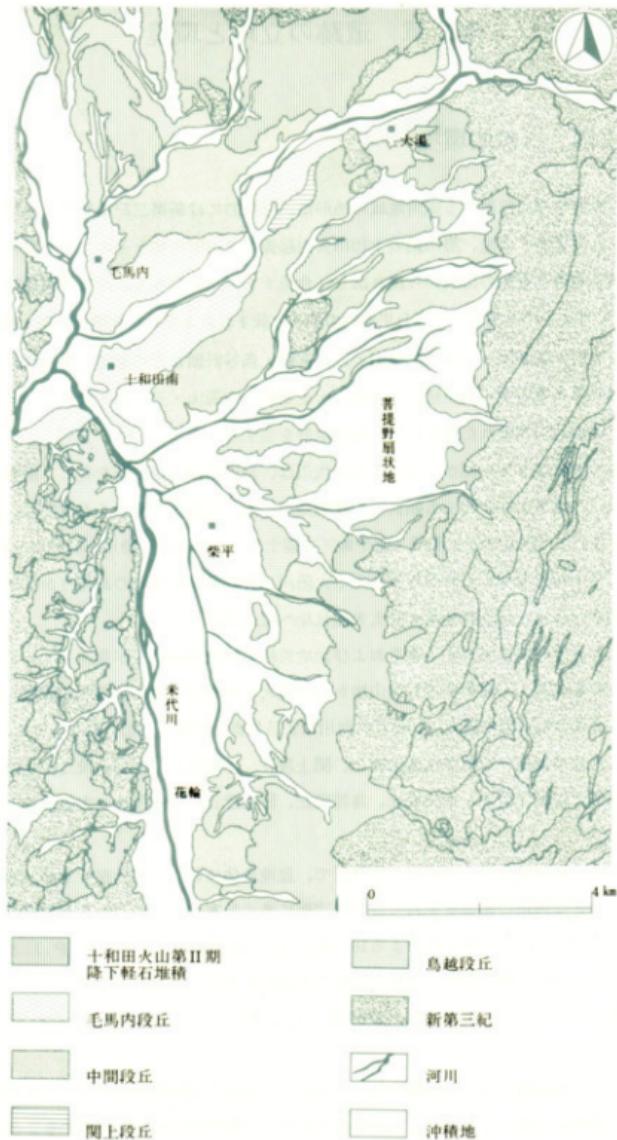
この盆地の西縁寄りを南側から流下する米代川は、岩手県四角岳に源を発し、湯瀬渓谷を曲流したあと、八幡平から流れくる熊沢川や夜明島川、五ノ宮巖から流れくる歌内川、浦志内川を合流させながら北流を続け、花輪・紫平地区で福士川、乳牛川、不動川、間瀬川、草木川を、毛馬内地区で十和田湖のあたりから流れくる大湯川、青森県境坂梨峠のあたりから流れくる小坂川を合流させたあと、流れを西に変え大館盆地へ流れ去る。

この米代川と米代川に流入する水系および盆地周縁には数段の段丘が発達している。

この段丘の形成は、①隆起する脊梁山地からの莫大な砂礫の供給による段丘形成。②十和田火山による大量の軽石流の流入。③現在の河川による侵食と砂礫の供給。によるとされている。段丘面は、盆地の北部～中部では鳥越段丘、関上段丘、中間段丘、毛馬内段丘の4段丘面に区分され、南部では高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、関上段丘、松館段丘、大里段丘の6段丘に区分される。

鳥越段丘は、鳥越軽石質火山灰層の堆積面で、盆地全体にわたって散在するが、米代川や大湯川などの大きな河川の影響を免れた盆地縁辺部に多く分布する。この段丘の形成時期について佐藤博之氏は、<sup>14</sup>C年代測定法による $10,400 \pm 200$ 、 $12,000 \pm 250$  (yr. B. P.) という年代を与えており、また、湯瀬館跡と飛鳥平遺跡の鳥越軽石質火山灰層中から発見された炭化木の<sup>14</sup>C年代測定では、それより古い $13,000 \pm 185$ 、 $13,000 \pm 180$ 、 $12,800 \pm 110$  (yr. B. P.) を測定している。

関上段丘は、鳥越軽石質火山灰層を切ってその上にのる火山碎屑物の河成2次堆積物の上面であるが、鳥越段丘面とはっきりした高度差をもたず、地形的に両者を区別することは一部を除いて困難である。この上位に<sup>14</sup>C年代測定で $8,600 \pm 250$  (yr. B. P.) とされる申ヶ野軽石質



第3図 段丘地形図

火山灰層がのることもある。

中間段丘は、関上段丘面と下位の毛馬内段丘面の間に位置する。

毛馬内段丘は、毛馬内軽石質火山灰層に関係しており、盆地内で南北方向の流路をもつ米代川・小坂川沿いには分布せず、東西方向に流路をもつ大湯川沿い、さらに米代川が大湯川と合流し流路を東西方向に変える神田付近から西側に分布している。構成物は下位より河成の細砂礫、大湯軽石質火山礫層、毛馬内軽石質火山灰層、安山岩の角礫を主体とする無層理の礫層の順になっている。大湯軽石質火山礫層は、考古学分野では大湯浮石層と呼ばれているもので、渡辺直経氏の火山礫層の下位の炭質物の<sup>14</sup>C年代測定では3,680±130 (yr. B. P.) という年代が得られ、直上の同層もそれに近い年代と考えられているが、近年の考古学・地質学の研究からは、西暦915年という年代も考えられている。また、毛馬内軽石質火山灰層は、考古学分野では毛馬内火碎流と呼ばれている。この火山灰層について平山次郎・市川賢一両氏は、胡桃館遺跡の発掘調査で得られた木片の<sup>14</sup>C年代測定で1,280±90 (yr. B. P.) が得られたことから、大湯軽石質火山礫層（大湯浮石層）の噴出直後に流下した毛馬内軽石質火山灰層は今から1,000年前の堆積であるとしている。これに対し、庄子貞雄・山田一郎両氏は、大湯軽石質火山礫層の噴出・堆積後、長期間を経過してから毛馬内軽石質火山灰層が流下したとの見解を述べている。

沖積層は、米代川、大湯川、小坂川とこれらの各支流沿いに礫・砂・粘土などの堆積作用が現在も進行中である。特に盆地と脊梁部との接点にあたる菩提野付近と大里付近では扇状地堆積物が鳥越段丘を覆っており、脊梁部が現在も絶えず上昇を続けながら堆積物を供給していることを示している。

段丘と沖積低地との比高は、20~40mで、崖面は軽石質火山礫・火山灰層特有の切り立った状況を呈する。軽石質火山礫・火山灰層の段丘は浸食を受けやすく、長期に亘り段丘上の雨水を集めた流水により縁辺に小さな谷が多数出現する。谷と谷に狭まれた部分は、半島状あるいは舌状台地状に低地に突き出している。

一つ森館跡は、鳥越段丘が侵食されて出現した舌状台地に立地している。この舌状台地の基部には火山碎屑物の河成2次堆積物である関上面がみられるが、菩提野扇状地からの堆積物も堆積している。地理的には、鹿角市の北東部の平元地区、小枝指・館と寺坂の間の花輪字一つ森と押通沢に所在する。館跡の立地している東西に延びる舌状台地の北側を根市川が、南側を寺鉢川が流れている。館跡の立地する台地上面と、下方の沖積低地（現状は水田とリンゴ園）との比高は6~28mである。北側の草木川の左岸には、小さな河岸段丘が数段確認される。沖積低地には、菖蒲谷地、蔚谷地という湿地を表す小字名がある他、館下タ、町端という小字名も残っている。

この鹿角地域は、ケッペンの気候分類で区分すると温帯多雨気候区（C f）に極めて近い亞寒帶多雨気候区（C f'）に属するとされている。山間盆地の内陸的気候を示すが、夏季にオホーツク高気圧の影響で東北地方北部の太平洋岸一帯に小雨混じりの冷涼な天候が続くと冷たいやませ（偏東風）が内陸のこの盆地まで入り込み、しばしば冷害となる。

#### 参考文献

- 秋田県 「花輪」『秋田県総合地質図帳』 1973（昭和48）年
- 佐藤博之 「秋田県小坂付近における十和田カルデラの軽石流堆積物」 "Journal of Geo. Soc. of Japan" 22巻 1966（昭和41）年
- 平山次郎・市川賢一 「1000年前のシラス洪水 -発掘された十和田湖伝説-」『地質ニュース』140号 1966（昭和42）年
- 富樫泰時 「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん』19号 1978（昭和53）年
- 藤岡一男・佐藤 久 「地学より見たる大湯環状列石」『大湯町環状列石』 埋蔵文化財調査報告2 文化財保護委員会 1953（昭和28）年
- 町田 洋・他 「日本海をわたってきたテフラ」『科学』51-9 1981（昭和56）年
- 庄司貞雄・山田一郎 「秋田県はりま館・大岱II・案内V・払田櫛および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析」『昭和57年度埋蔵文化財センター研修会資料』 秋田県埋蔵文化財センター 1983（昭和58）年
- 秋田県教育委員会 「湯瀬館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書I』 秋田県文化財調査報告書第78集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 「飛鳥平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第89集 1982（昭和57）年
- 内藤博夫 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43巻10号 1970（昭和45）年

## 第2節 歴史的環境

鹿角地方には、縄文時代から近世までの遺跡が約500カ所所在する。

本書では、このうち中世城館と呼ばれている遺跡群とそれに関連する遺跡を中心に歴史的環境を述べてみたい。

鹿角（上津野）地方が正史上に登場してくるのは、日本三代実録元慶2年10月12日条が最初であるが、弘仁2年7月に文室綿麻呂が伊豆村の蝦夷を討伐するために出羽・陸奥両軍の俘軍でこれを挾撃したが、その攻撃目標の位置と出羽方の俘軍の進軍経路を考えると山間を縫うように流れる米代川によって開けた鹿角（花輪）盆地を通過したと考えることは妥当である。また、秋田県北部の地と考えられている邑良志門村の降俘、吉弥侯部都留岐が岩手県北部の爾薩体村の伊加古を討つべく出羽国府から米を下給されたが、新野直吉氏はこれを鹿角（花輪）盆地をめぐる領域争奪戦と考えている。出羽と陸奥の境界線上にあり、東西交通の要路となっているこの地域の特異な位置が鮮明にうかびあがる。

日本三代実録には、元慶2年の住民闘争である所謂元慶の乱で秋田城を攻め落とした「夷俘」12カ村のうち、米代川流域にその拠点をもつ4カ村の一つ、上津野として記され、鎮守將軍小野春風が焼き打ちされた秋田城救援のため陸奥國から急行する際、最初に鹿角に入り、教諭している。順化の浅い「夷俘」ではあっても、それ以前から官軍と接触交流があったことを想像させるし、この地方が陸奥北部における「夷俘」行動、陸奥と出羽との共同作戦には欠くべからざる軍事上の要路として重視されていたと思われる。

また、鹿角（上津野）地方は、猿布・紫根などの生産地として知られるが、安村二郎氏は、古代貴族たちがこの特殊所出物を所當官物として組織的に徵収できるように郡を立てて、郡司にその調達納入を担当させ、猿布『毛布の細布』の所當布指定郡として鹿角郡が建郡されたのではないかと推定している。そしてその時期について、『吾妻鏡』文治5年9月3日の条に、鹿角と隣り合う東の藤部郡と西の比内郡が記載されていることから、単一の生活ブロックである鹿角にも単一の郡が建てられていたであろうとして12世紀の初め頃でなかったかと推定している。

古代の遺跡は、歌内・飛鳥平・北の林I・北の林II・上葛岡IV・駒林・玉内・一本杉・中の崎・下沢田・孫右エ門館・案内I・案内III・案内IV・案内V・妻の神I・妻の神II・下乳牛・万谷野・餅野・高市向館・小平・源田平・鳥野・菩提提野・丸館表・大湯環状列石周辺・堪忍沢・用野目川向III・高屋館・太田谷地館・はりま館・白長根館I・丑森などの集落・生産遺跡と、三光塚1号・三光塚2号・枯草坂・曲谷地A・曲谷地B（泉森…旧名 蝦夷森）・石野・申ケ野・高田の地元で「古墳」と呼ばれる奈良時代の墳丘墓がある。

中の崎遺跡の堅穴住居跡から出土した4点の杯形土器は、古代と中世を繋ぐ土器として注目される。

中世の遺跡として65館以上と言われる館跡群があり、発掘調査も、小枝指・湯瀬・新斗米・小豆沢・長牛城・乳牛・花輪・孫右エ門・高市向・はりま・館平・白長根・横・（仮称）妻の神・（仮称）西町・高瀬・高屋・当麻・柏崎・太田谷地・一つ森の21館にのぼる。

中世の鹿角に関する文書は少なく、鹿角地方の中世の実態は断片的でしかない。

鹿角地方の館名が文書に初めて記されたのは「建武4年8月23日曾我貞光申状」中の大里樋、二藤次樋、當樋・大豆田樋、□□□尾樋の5館である。

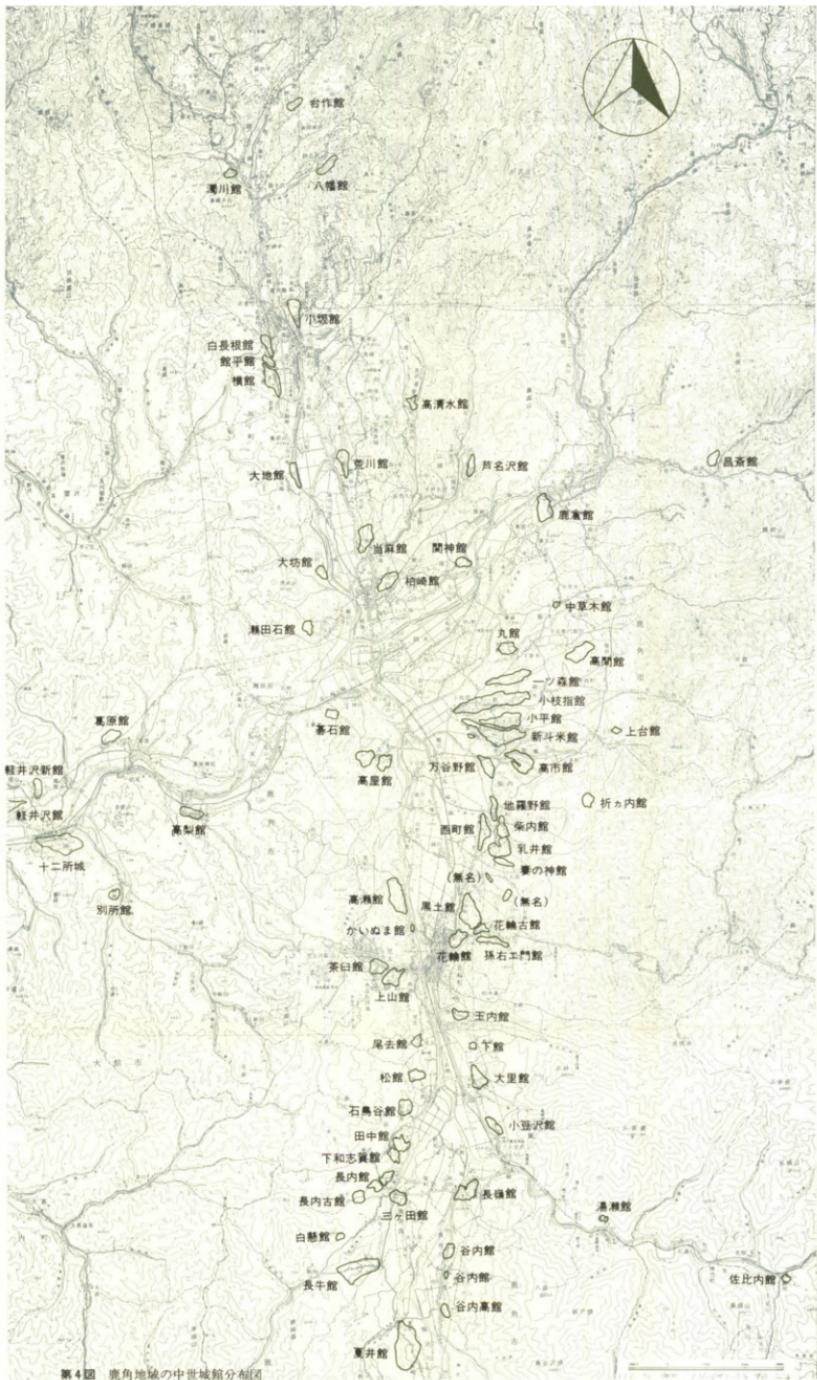
また、鹿角地方の中世の館名が文書に出る最期は、天正19年に破却が行われた湯瀬・大里、谷内・長嶺・小豆沢・黒土の6館である。また、江戸時代に記録された『鹿角由来集』は、戦国時代後期の実態を示すとされ、鎌倉時代初期の奥羽合戦後に関東御家人の安保・成田・奈良・秋元の4氏がその勳功により地頭として任命されて鹿角に入部したあと、4氏を出自とする庶流の独立化に伴い、既存の村に定着し、地縁的な結合を強めて支配権を確立したと考えられる記述がある。4氏の一族は鹿角地域を分割支配しており、成田一族は、総領が馬内を所領とし、庶子らが、佐比内・湯瀬・長嶺・谷内・高市・神田・大地・荒川・高清水・関神（上）を、安保氏は総領が大里を、庶子らが田山・三ヶ田・夏井・石鳥谷・松館・尾去・玉内・花輪・紫内・乳牛・中紫内・折加内を、秋元氏は総領が高瀬・久保田・用ノ目・花軒田・松山・川原館を、奈良氏は総領が大湯を、庶子らが新斗米・小枝指・小平・瀬田石・芦名沢・草木（寺坂・室田・丸鶴）を所領としている。本姓よりも村落名を姓として名乗っている。

鹿角地方の館跡の分布については、江戸時代の寛文年間（1661～1672年）に成立した『鹿角由来記』で「鹿角42館」、昭和56（1981）年刊行の『秋田県の中世城館』で58館の分布が確認されている。最近では、その数も65を超えるとの報告もなされている。

『館址 東北地方における集落址の研究』の中に、「このような細長い舌状台地が鹿角盆地を貫通する米代川右岸には數多く発達していて、ほぼ南北に並列しており、それらのほとんどすべてに規模荘大な館が築かれていて、花輪線の鉄道沿線からこれを望むと、方台状あるいは方壇状の館跡が堅々として偉觀を呈している。」と記述されているように、鹿角地方の館跡は、舌状台地状や半島状の自然地形を巧みに利用した平山城形式が主体をなしている。數条の空堀を掘削することにより、切り立った断崖上に郭が連続する平山城地形が出現することから、構築は比較的容易である。このことが他地域に比べ館跡の分布が濃密である理由の1つであろう。逆に単郭式や山城形式の館跡は僅少である。

また、規模の大きな館跡が隣接しているのも本地域の特徴の1つである。

狭い地域に密集する館跡の性格については、塩谷順耳氏は、『文化財レポート（129）秋田



第4図 鹿角地城の中世城館分布図

の中世城館』の中で、「例えば鹿角（中世後期を通じ南部氏領）であれば、東からのびる舌状台地突端部を利用し、その基部を空堀で区切り単郭、或は連郭状平坦面を構成、時にそれに帯郭・腰郭をめぐらしている。従って単純な形を示し、水田面からの高さも20~30メートルのものが多く、軍事的機能はあまりもっていない。城というよりは地侍の居館的性格がつく、そのため麓に中世の集落をもっている。」「要するに館は、村を支配する地侍が、村民労働力を徴集して造ったものであり、そのため村落単位に構築され、故に軍事的機能よりは行政的要素をもつものであった。」と述べている。

これに対し、安村二郎氏は、「鎌倉以来の鹿角の地主として、久しく繰り返された南部氏、浅利氏、秋田氏の鹿角侵略の手から、相伝の土地を保守すべく、時には和し、時には抗し、絶えず権謀術策の禍中にあったことを示しているように思われる。」と歴史的背景を洞察し、「史書にその名を留めることのない小館であったにしても、相当の規模のもとに郭を営み、濠を掘り、塁を固め、防備堅固の跡を偲ばせているのは、かかる状況の然らしむるところ」と把握し、行政的性格よりも軍事的色彩が強いことを述べている。

しかし、両氏とも寛文年間成立の『鹿角由来記』にみえる「○○村○○△△領知 本名□□館有」の記述を「一村一館形式を表す」ものと解釈し、「鹿角盆地においては、古い村には必ず館跡があり、いわば一村一館の形態がとられている。」との認識がなされており、「沖積低地に○○村があり、○○△△の所領であった。領主は村名の○○△△を名乗っているが、本名は□□である。領主は自分の支配する○○村を見下ろす高台に居館を構えたので、その居館跡がある。」と釈読されるのである。

これに対し、『鹿角由来記』が成立したのが近世になってからであり、地形・地質的に恵まれていることから小規模な村力（50戸前後）でも構築できることと、発掘調査の成果から「中世には、地侍で有力農民でもあった○○△△を指導者とする集落堡塞的な館であった○○村があった。この村が近世になって段丘上あるいは台地上から農地のある下方の沖積低地に移転したが、それ以前の村名をそのまま継承した。故地である館がすぐ近くにある。」と解釈すべきとの意見もあるが、「領知」の解釈に無理が生ずる。

発掘調査された館跡のうち、『鹿角由来記』に「小枝指村 小枝差左馬領知 本名奈良也館有」と記されている小枝指館を調査した東京大学東洋文化研究所は、「この館の上にはある期間にわたって、かなり多數の堅穴住居が営まれたことは確定であろう」また「調査した限りでは、堅穴住居は館址の内部のみにあって、外部はない。」「一朝有事の際、たてこもるために逃城的な堡塞というよりも、むしろそれ自体に集落を内包した堡塞と認むべきである。このことは、鹿角地方の他の多くの館址も同様と推測されることは、当時のこの地方の集落の性格や成立の事情を考える上に重要な手がかりとなろう。要するに、七館の遺跡は多郭連続形

式の館址で、しかも堅穴住居を内包した集落堡塞の遺跡であった」と結論している。

また、『鹿角由来記』に「血牛村 血牛六郎領知 本名安保 館有」と記されている乳牛館は、乳牛平遺跡と妻の神田遺跡として分割されて調査されたのであるが、「（乳牛平遺跡は）妻の神田遺跡から連続する乳牛館の一部であるが、（中略）I～VI郭の平場は妻の神田遺跡に比べ極めて小規模であり、通常の生活の場とは考えられないことなどから、妻の神田遺跡側との間には大きな相違点が指摘できる。加えて妻の神田遺跡と乳牛平遺跡III・IV郭との間には二重の堀、土壘状小山が存在し、III・IV郭には妻の神田遺跡側からの防禦性、隔絶性がうかがえる。こうしたことから広い郭面積を有し、多くの掘立柱建物跡が構築され、内部に土壇墓をも有する妻の神田遺跡側を主郭と考えると、乳牛平は戦時に備えた軍事的施設である色彩が強く乳牛館の如く必ずしも交通の要所でなくとも、軍事的色彩の濃厚な部分を鹿角地方の中世城館は備えている」と述べ、同一台地上の日常生活の場に隣接して戦時の施設としての郭群が備えられていることを強調している。

鹿角地方の館跡の性格は、文献解釈と歴史的背景を抜きにして考察することはできないが、増加しつつある考古学的調査の成果からは、行政的要素をもつ館よりも集落堡塞的で軍事的要素を併せもつ館が多い。

一つ森館は、丸館と小枝指館に挟まれて存在するが、一つ森館に関する史・資料や伝承は皆無である。鹿角地方の館跡には、伝承不詳のものもあるが、それらは小規模な館跡であり、11の郭から成る館跡で伝承すらない館は一つ森館跡だけである。至近距離に丸館・小枝指館・小平館・新斗米館など奈良氏の一族が拠った館が並んでいるところから関直氏は、一つ森館も奈良氏一族によって構築されたのではないかと推定している。

#### 引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 「湯瀬館遺跡付篇」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』、秋田県文化財調査報告書第78集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ 一妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡遺跡』
- 秋田県文化財調査報告書第107集 1984（昭和59）年
- 南部叢書刊行会 『鹿角由来記』『南部叢書』第1冊 1927（昭和2）年
- 塩谷順耳 「鹿角地方の館」『秋田県立博物館研究報告』第3号 秋田県立博物館 1978（昭和53）年
- 塩谷順耳 「文化財レポート（129）秋田県の中世城館」『日本歴史』第386号 1980（昭和55）年
- 安村二郎 「新斗米館の歴史的環境」『新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第II次発掘調査報告書』

- 鹿角市文化財調査資料16 鹿角市教育委員会 1981（昭和56）年
- 安村二郎 「鹿角の建都」『別冊教育秋田』No.5 1982（昭和57）年
- 関直 「一つ森館」『鹿角の館・館跡航空写真測量調査報告書（5）』鹿角市文化財調査資料30  
鹿角市教育委員会 1986（昭和61）年
- 江上波夫・関野雄・桜井清彦 「秋田県鹿角郡紫平村小枝指七館遺跡」『館址 東北地方における  
集落址の調査』東京大学東洋文化研究所 1958（昭和33）年
- 安村二郎・片岡正一・阿部良行 「鹿角地方の城館－航空写真測量調査に関する一』『よねしろ考古  
古』第4号 よねしろ考古学研究会 1988（昭和63）年
- 新野直吉 『古代東北史の人々』 1978（昭和53）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『護場整備地域内（鹿角北東地区）遺跡分布調査報告書』 秋田県文化財調査報  
告書第54集 1978（昭和53）年
- 秋田県教育委員会 『鳥野遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第49集  
1978（昭和53）年
- 富樫泰時 「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん』19号 1978（昭和53）年
- 鹿角市教育委員会 『小平遺跡発掘調査報告』 鹿角市文化財調査資料第10号 1979（昭和54）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告IV－北の林II遺跡・上葛岡I・上葛岡II遺跡・  
小豆沢館遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第90集 1982（昭和57）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告V－上葛岡IV遺跡・駒林遺跡・案内II遺跡・  
猿ヶ平I遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第91集 1982（昭和57）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告VI－猿ヶ平II遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・  
案内III遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第99集 1983（昭和58）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告VII－柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根  
遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第106集 1984（昭和59）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告IX－孫右エ門館遺跡・案内I遺跡・妻の神II  
遺跡・下乳牛遺跡・西町I遺跡・西町II遺跡－』 秋田県文化財調査報告  
書第119集 1984（昭和59）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告X－はりま館遺跡・横館遺跡・  
大岱I遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第109集 1984（昭和59）年
- 秋田県教育委員会 『東北縱貫自動車道発掘調査報告VIII－館平館I遺跡・館平館II遺跡・白長根館  
II遺跡・丑森遺跡・道合I遺跡・道合II遺跡・大岱II遺跡・大岱III遺跡・円  
川原遺跡・大岱IV遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第120集

1984（昭和59）年

鹿角市教育委員会 「御休堂遺跡」 鹿角市文化財調査資料19 1984（昭和59）年

鹿角市教育委員会 「新斗米館跡－鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書－」 鹿角市文化財調査資料16 1981（昭和56）年

鹿角市教育委員会 「高市向館跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料22 1982（昭和57）年

接田 隆 「鹿角地方の城館－考古資料より－」『よねしろ考古』第4号 神奈川県考古学研究会  
1988（昭和63）年

柳沢弘志 「古代の鹿角」『鹿角市史』第1巻 1982（昭和57）年

錦木公民館編 「昭和5年版曲田慶吉先生遺稿 錦木村郷土誌」 1930（昭和5）年

大和久麗平・奈良修介著、秋田県編集『秋田県史考古編』 1977（昭和52）年

秋田県教育委員会 「西山地区農免農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書II

－高瀬館跡－」 秋田県文化財調査報告書第153集 1987（昭和62）年

秋田県教育委員会 「西山地区農免農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書III

－太田谷地館跡－」 秋田県文化財調査報告書第172集 1988（昭和63）年

秋田県教育委員会 「西山地区農免農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書IV

－用野目川向畠遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第182集

1989（平成元）年

秋田県教育委員会 「西山地区農免農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書V 一太田谷地

館跡第2次調査－」 秋田県文化財調査報告書第182集 1989（平成元）年

鹿角市教育委員会 「柏崎館跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料36 1989（平成元）年

鹿角市教育委員会 「当麻館跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料37 1989（平成元）年

鹿角市教育委員会 「花輪館跡試掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料27 1984（昭和59）年

鹿角市教育委員会 「花輪館跡試掘調査報告書（2）」 鹿角市文化財調査資料34

1988（昭和63）年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

昭和63年度に実施した範囲確認調査の結果から、農道整備事業区域内における遺跡範囲は、800mとなつたが、『鹿角の館』では一つ森館の現況が次のように説明されている。

「館跡は、台地先端から800m付近で空堀によって截れた東西800m×南北100~300mの範囲に、11個の郭によって構成されている。」

#### 第I郭（東西80m×南北10~25m、以後數値のみで記す）

I郭は、一つ森館の西端に位置している。郭上面は、東→西へ傾斜をなしており、平坦地とは言えない。現況は山林である。郭上面及び周縁に、空堀土塁等の遺構は認められない。上面西側に、竜神を祀った祠がある。郭南側の斜面に、平場が三段認められる。

郭北縁より、8m下に帯状の平場（東西100、南北15m）が認められる。I郭北西端にはじまるこの平場は、I郭の北堀を東西に走り、II郭の北堀に於いてその幅（10m）を広げる。帯状の平場は一旦途切れるが、II郭北堀をめぐってII・III郭間の堀底に通じ、II郭の東堀から南堀をめぐり、I・II郭間の堀底から北堀の平場に達する。途中、I郭南側中段の平場へ分歧する。北側の平場と南側の平場が、館の西端をめぐって繋がってはいない。

郭の先端の斜面上に、切り込み（北 $\leftrightarrow$ 南）によってできた小丘（郭上部より7m下）がある。他の館跡に於いても同様の例が認められるものもあるが、その意図するところは不明である。

#### 第II郭（30m~60×185m）

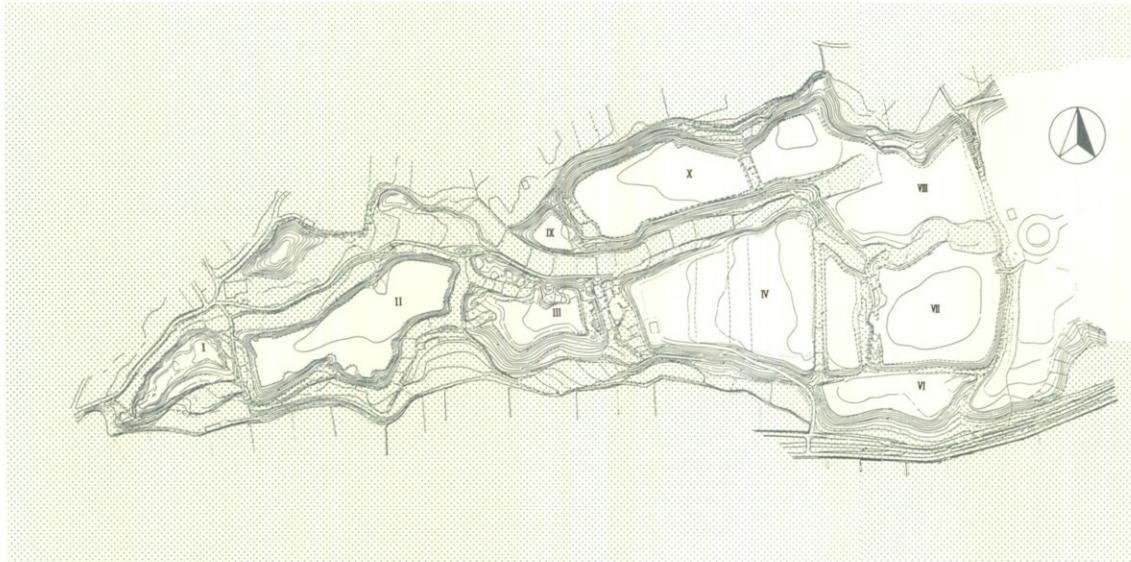
II郭は、I郭の東に位置する。西-I郭との間は、空堀（北 $\leftrightarrow$ 南、幅30m、長さ60m、深さ-I郭起算-8m、以後數値のみ記す）によって截れている。東-III郭との間も空堀（北 $\leftrightarrow$ 南、25m、60m、II郭起算6m）によって截れている。北側と南側は崖面となっている。郭上面は平坦地となっており、現況は山林である。郭の裾を帯状の平場がめぐっている。東堀から南堀にかけての平場は、周囲より低くなつておらず、北東→南西に傾斜面を成し、空堀の様相を呈している。この平場に沿つて土塁状の盛土（北東 $\leftrightarrow$ 南西）が認められる。盛土の外方は、なだらかな傾斜面となっており、その方向から盛土を見ると土塁とは見えない。郭の南側西側から、郭上部へ向かう通路跡らしき平場がある。郭上部崖縁にも、これと通じた形跡が認められるが、断定はできない。

郭の北堀の平場の3m下に、腰郭らしき一区画（東西130m×南北15m）がある。その上面は、平坦地となっており、北側の低地との比高差は、6mである。崖縁に土塁状の盛土が2個



「鹿角の館跡航空写真測量  
調査報告書(5)」を一部改変

第5図 一つ森館跡周辺小字名と切絵図



『鹿角の館一ノ森跡航空写真測量調査報告書(5)』  
を一部改変

第6図 一ノ森跡現況実測図

と続く土壘状の盛土が部分的に認められる（西側の盛土—65m × 40m、高さ約10m、東側の盛土—30m × 15m、高さ3m）。

#### 第III郭（70m × 25~45m）

III郭は、館跡のはば中央に位置する。郭上面は平坦地で、現況は山林である。III郭の北裾、南裾に、通路を兼ねる帯状の平場は存在しない。郭の西縁—西南隅に、郭上部への通路らしき坂道（東→西）が認められる。館に関係するものは不明である。

III郭の北側部分に於いて、郭の西裾の北よりに、上方への通路らしきものが認められる。この通路（幅6m）は、その北側部分と郭上部とによって、堀底道の様相を呈し、下方から東へ50m進むと郭上部に達するが、その付近で向きを北へ変え、郭北側の侵蝕谷に落ちている。この通路によって区切られた北側部分（50m × 19m）は、東→西へゆるやかな傾斜面となっている。この傾斜面は、2~3の切り込み（北 ⇄ 南）によってできた盛土になっている。これらの地形は、館に関係する遺構であったと推察されるが、その意図するところは不明である。明らかなのは、これが自然地形ではなく人為的なものであるということである。鹿角地方の館跡で、このような地形は現在までのところ認められない。

北側部分を除けば、III郭は他の郭と同じく、その上面は平坦地となっており、現況は山林である。

III郭の東、IV郭との間には、幅45mの空堀（北 ⇄ 南）がある。この空堀の内部は、人為的構築によって、三重堀の様相を呈している。III郭東縁下に平場（5m × 65m）がある。平場の東側崖縁に、なんらかの施設が構築されていたと思われる、3個の土壘状の盛土がある。三重堀の中央の空堀（12m、50m、IV郭起算6m）が、III郭とIV郭とを截つ、本来の意味での空堀に相当する。IV郭の西縁下の平場（5~20m × 70m）の西側崖縁にも、土壘状の盛土（5~15m × 75m）がある。この盛土は、対岸III郭側の盛土と対をなすものである。

IV郭側の空堀の堀底は、北側に於いて、IV郭北裾に認められる平場に通じている。この平場は、IV郭北裾中央付近で、郭上部への通路の様相を呈している。堀底は、南側に於いてもIV郭の南側斜面を通って、IV郭・V郭間の空堀に通じていた形跡がある。この空堀が、字一つ森、押通沢の字境になっている。

#### 第IV郭（145m × 西側55m、東側125m）

IV郭は、三重堀の東側に位置する。館跡中最も大きな郭で、南北の幅が、西側と東側とではその差が70mある。IV郭の東側は、空堀（北 ⇄ 南、15m、115m、IV郭起算4m）によってV郭と截れている。南側は崖面となっており、侵蝕谷を隔てた北側は、X・XI郭となる。上面は平坦地で、現況は畑地である。郭上部及び周辺部分に遺構は認められない。

郭の北東隅に通路（幅5m）が認められるが、館に関係あるものは不明である。VI郭との

間の空堀は、比較的浅く、堀底は平坦地となっている。堀底は、北側に於いてゆるやかな傾斜をなしながら、通路に通じている。南側に於いても傾斜面となっており、郭南側斜面に三重堀と郭側の堀底と繋がっていた形跡が認められる。三重堀の堀底から続く郭の北裾に認められる平場が、郭上部への通路であったかどうかについては、現在、郭上部の崖縁斜面に、なんら形跡が認められない。

#### 第V郭 (25m × 80~100m)

V郭は、IV郭の東側に位置する。空堀（北 $\leftrightarrow$ 南、15m、75m、V郭起算3m）によってVI郭と区切られている。南側と北側は崖面となっている。北側には、侵蝕谷を挟んでVII郭がある。郭上部は平坦地となっており、現況は荒地である。郭上部・周縁に遺構は認められない。

#### 第VI郭 (30m × 80~135m)

VI郭は、館跡の東南隅に位置する。三方を崖面によって囲まれている。南側を寺跡川が流れている。郭は、北側に位置するV・VII郭より、5m低くなっている。これらとは段差によって接している。郭上面は、平坦地で、現況は荒地である。北縁に沿って、東西に走る溝・窪地が認められる。空堀の跡であろう。

#### 第VII郭 (100m × 95m)

V郭の東側、VI郭の北側に位置するVII郭は、館跡東端の郭の一つである。郭上面は平坦地となつておらず、現況は山林である。郭の西側崖縁部分に、郭内部の出入口跡の遺構らしきものが認められる。

郭の北側、VII郭との間は、空堀にしては不整形な窪地（東 $\leftrightarrow$ 西）となっている。館跡北側中央付近からの侵蝕谷に通ずるもので、東へいくにしたがって、周囲との段差を減じている。

郭上部、周縁部分に、遺構は認められない。東側に於いて、東方台地へ通ずる道があるが、東側崖縁に、遺構の存在・形跡は認められない。

#### 第VIII郭 (55m × 115m)

VIII郭は、VII郭の北側に位置する東端の郭の一つである。北側斜面上に、郭上部に向かってくる平場がある。郭上部への通路であったか。VII郭と北方XI郭との間の溝（東 $\leftrightarrow$ 西）は、空堀跡であろうか。西側に於いては、西側との比高差も大きいが、東側部分に於いては、その境が認められない。郭上面は、平坦地で、現況は山林である。東縁部分に土壘は認められない。

#### 第IX郭 (35m × 30m)

侵蝕谷によって、III郭、IV郭のある台地と区切られた台地の西端に位置するIX郭は、館跡中最も小さい郭である。上面は平坦地となつておらず、空堀（北 $\leftrightarrow$ 南、5m、50m、IX郭起算2~4m）によって截れたX郭より4m低くなっている。現況は山林である。

## 第X郭 (25~55m × 130m)

X郭は、IX郭の東に位置し、XI郭とは空堀（北～南、12m、30m、X郭起算2m）で区切られている。北側は崖面が低地へ落ちており、南には侵蝕谷を挟んでIV郭がある。上面は平坦地となっており、現況は山林である。郭上部に遺構は認められない。郭西端の1m下に幅5~12mの平場がある。また、北東斜面上に細長い平場が認められる。

## 第XI郭 (55m × 80m)

XI郭は、館跡の北東端に位置する。東側から北側は崖面となっている。南には、侵蝕谷を挟んでIV郭がある。上面は平坦地となっており、現況は荒地である。

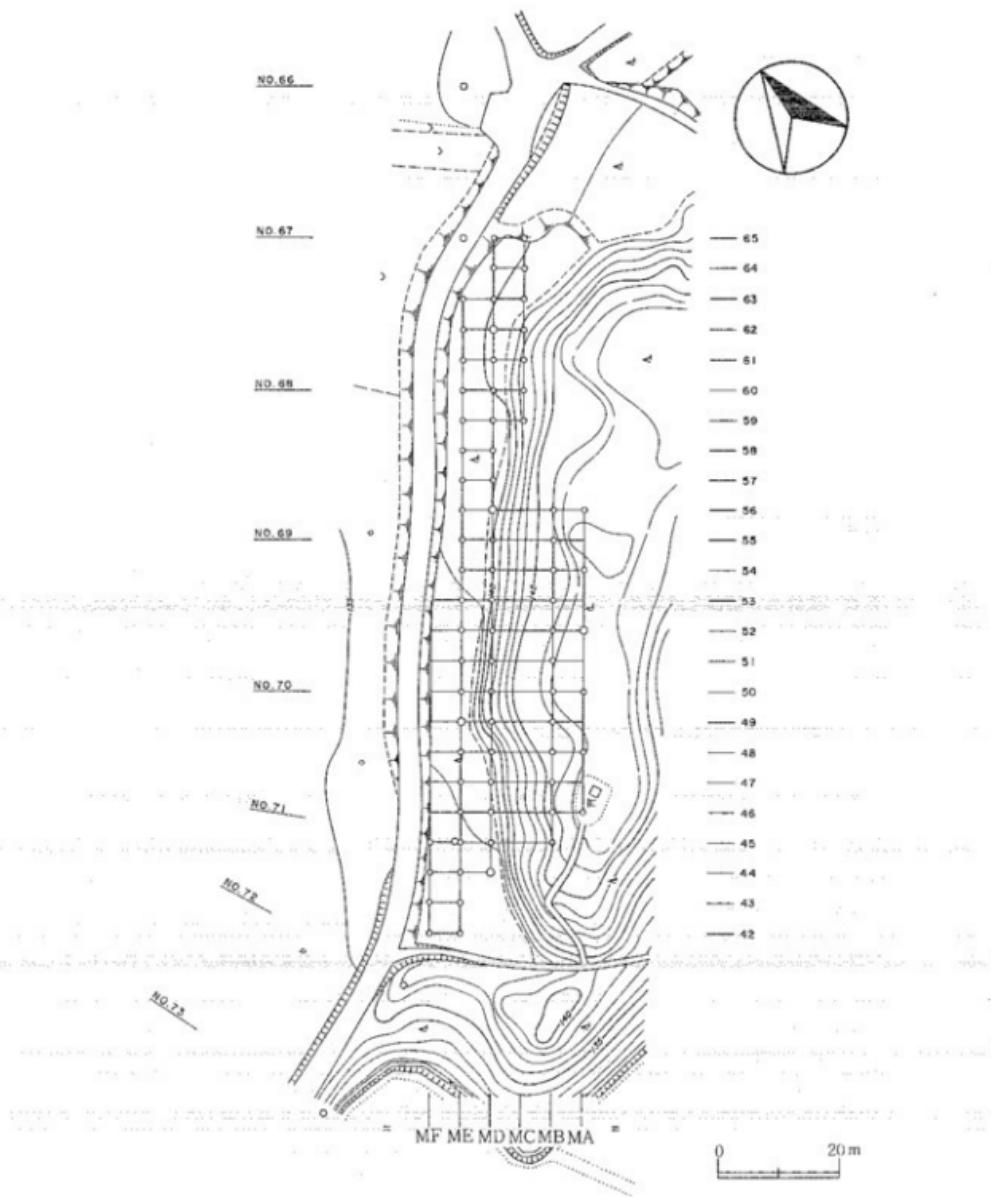
一ツ森館は、III郭・IV郭の間の三重空堀を境に、それ以西（I～III郭）とそれ以東（IX～XI郭）とでは、館の構造上に於いて、明らかに違いがみられる。館跡に於ける構築年代の違いによるものか。中世城館の舌状台地に於ける占地・館跡の遺構から推察すれば、I～III郭が初期のもので、IV郭以東は、後に拡張されたものではなかろうか。」

発掘調査対象区域は、第I郭の郭北縁部分とその下方の帯状の平場部分である。郭の北側の急斜面には自然崩落個所が数ヶ所認められる。調査区域には、スギ・ホウノキ・クリ・ウルシ・タラノキなどの樹木のほか、フジ・ササ・アカネ・ウドなどが繁茂していた。戦前は耕場であったが、戦後の一時期食糧増産のため耕作され、その後人工林となつたという。北側に現農道が帯状平場縁辺を削平してつくられており、平場自体も東から西に緩やかに傾斜している。

## 第2節 調査区の設定

昭和63年度の範囲確認調査により、工事対象区域内における遺跡の範囲とその内容が明らかになったことから、遺跡内に県農政部鹿角農林事務所が20m毎に打設した中心杭のうち、No.69とNo.70を活用し、これらの杭を結ぶ線を基準線とし、No.70杭を基点とする4m × 4mの方眼に杭を打設した。No.70杭をME50とし、みかけの東西方向にMA～MF、南北方向に42～65を付し、アルファベットとアラビア数字の組合せにより各方眼杭の名称が付される方眼（グリッド）は、みかけの南東隅の杭に付された名称で呼称した。MA52・MD44・MD56・MD62・ME49の5本の杭は水準点から標高を誘導したレベル原点杭（規格9cm × 9cm × 90cm）とし、頭部を10cm幅で赤色に塗布し、レベル数値とグリッド名を併記した。他の杭は、4.5cm × 4.5cm × 60cmの規格で頭部を10cm幅で白色に塗布し、グリッド名を記入した。

この調査区のNo.69とNo.70を結ぶ基準線は、磁北から東側に36°30' 傾している。なお磁北は真北から7°15' 西に偏している。



第7図 グリッド配図

### 第3節 調査の経過

発掘調査は4月17日からの予定であったが、大雨と強風に見舞われ、近くの館集落研修センターを借用して作業員説明会を開き、作業時間、作業内容、賃金について説明を行った。4月18日から調査区内に散乱する杉等の枝葉の片付けを開始した。4月19日に事務所兼器材置場となる2階建てのプレハブが建設され、埋蔵文化財センターから発掘器材が搬入された。4月21日に下段の枝葉の片付けがほぼ終了したので、埋め戻されている前年度の範囲確認トレントの再掘り下げを行った。その結果、下段の帯郭状の平場には空堀状落ち込みが1条確認された。トレントの東側（郭側）は0.2～0.3mの深さで地山である鳥越軽石質火山灰層（所謂シラス層）に達するが、西側（現農道側）では、1.5～1.6mの深さでも黒色土・暗褐色土が堆積している。この黒色土・暗褐色土の堆積土の上半部に大湯浮石層が薄く堆積していた。調査区が狭いので、排土場所を調査区外の南側工事区内に求めたが、東側下方に水路・水田、西側に現農道があるため土留め柵を設置することにした。4月24日から本格的に粗掘りを開始した。4月25日と26日にグリッド杭が測量業者により打設された。粗掘りを42ラインから北側に向かって進めて行くが、大きな杉の根株が多く、抜去作業も同時併行させた。4月28日には、時ならぬ吹雪となり、粗掘り作業が難行する。5月8日から粗掘り作業を再開し、前年度のトレントを精査するが、「空堀」の掘り込み面の確認が困難である。

5月9日には、MC64の急傾斜面（「空堀」の東側壁面か）で4点の縄文土器片と石器剝片1点が出土したが、いずれも流れ込んだものと判断した。MC58～61の斜面下方で幅0.5～0.6mの溝状遺構1条と土坑様遺構1カ所を検出した。5月10日に60ラインの前年度トレント北側壁の土層断面を実測した。5月11日から郭上面のNA51～MA55で粗掘りを開始した。土坑様落ち込みを2カ所検出した。下段の粗掘りも継続し、ME56のシラス層中から青磁破片1点が出土した。54ラインにある前年度トレントの北側壁面の土層断面を実測した。

5月12日に上面のMA48で粗掘り中に美濃灰釉皿小片が1点出土した。下段の粗掘りがほぼ終了したのでプラン確認作業を開始した。平元小学校の片岡正一教諭が来跡され、館跡について御教示いただいた。5月15日から下段の精査を開始した。粗掘り時に現農道への影響を考慮して残していたMFラインの法面を掘り下げる。これにより地山面の地形は、現農道開削時にあまり削平されていないことが判明した。縄文時代前期の土器片が数片出土した。郭上面のMA48では柱穴様ピットが多く検出した。5月17日には、下段のプラン確認・精査を継続したが、トレントで「空堀」としたプランについて、自然流水による亀裂が堀状を呈するかどうか疑問がでてきた。それまでの館跡調査で検出された「空堀」と形状、掘り方が異なっていることが判明した。5月18日に郭上面の土坑・柱穴様ピット群の写真撮影と平面実測を行う。下段

は「空堀」の精査を続行した。5月24日から郭上面と下段の平場を結ぶ斜面の粗掘りを一部行ったが、斜面に生育した木が強風により倒れる所謂風倒木痕が多く、大きな亀裂を生じているので作業の続行は斜面の崩壊を招く恐れがあるため中止した。下段の土坑・溝・空堀の精査を続行した。6月6日には、郭上面の写真撮影、実測、地形測量が完了した。上面調査時に耕土置場がないため、隣地に仮置きしていたのでこれを調査区域に戻す作業を開始した。下段の地形測量を開始した。6月8日には、下段の土坑・溝等の写真撮影と遺跡遠景写真撮影を行った。耕土置場から隣地のリンゴ園に土が飛散するのを防ぐため、上郭を固める作業と遺物洗浄、器材洗浄を行う。6月9日器材を梱包し、トラックにて埋蔵文化財センターへ向け搬出した。ブレハブ解体後、跡地を清掃し、現地調査を終了した。検出した遺構は空堀1、溝3、土坑2、柱穴様ピット7、T-Pit 1の14遺構、遺物は縄文土器片、石器・剣片、陶磁器片、鉄製品あわせてコンテナ3箱分であった。

## 第4章 調査の記録

### 第1節 検出遺構

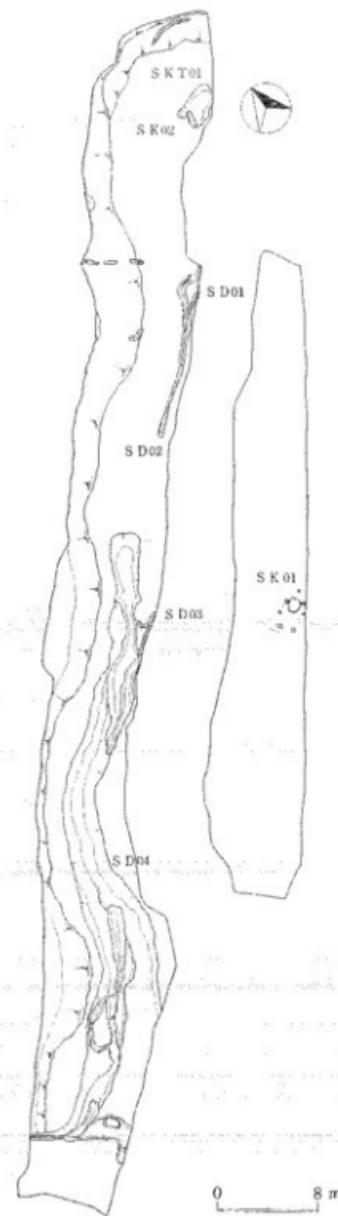
発掘調査で検出した遺構は土坑2基、T-Pit 1基、柱穴様ピット7カ所、溝状遺構3条、空堀1条の14遺構である。これらの遺構内からは、遺物の出土がほとんどなく、遺物から時期決定は不可能である。しかし、プラン確認状況、埋土の観察等から、本遺跡の出土遺物の年代観に合わせ、縄文時代と中世～近世の2時期に分類した。

#### 1 縄文時代

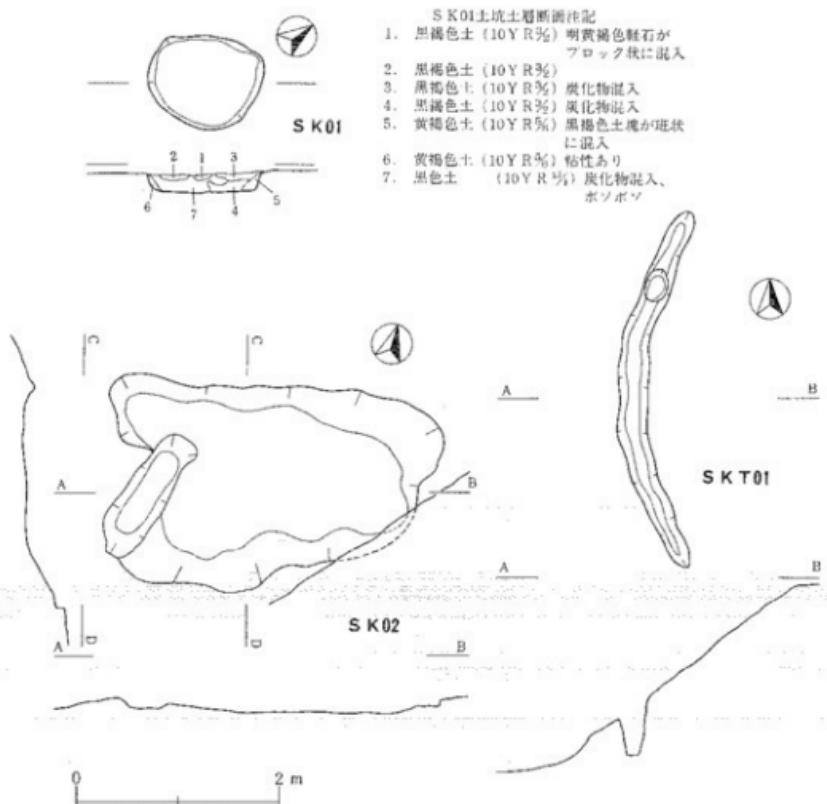
縄文時代の遺構と考えられるのは、土坑2基とT-Pit 1基の3遺構である。

##### (1) 土坑(第9図、図版5・6)

S K01 郭上面のMA53グリッドで検出した。やや不整な梢円形プランを呈し、長軸1.1m、短軸0.94m、プラン確認面から木根によると思われる小さなピット・くぼみが多数ある底面までの深さは0.16～0.18cmである。底面には火熱による変色部分や炭化物の付着もみられる。長軸方向はN-62°-Eである。埋土は7層に分層できたが、炭化物の混入が多い。遺物は出土しなかったが、プラン確認状況(周囲の柱穴様ピット群よりも掘り込み面(層位)が下位)



第8図 遺構配図



第9図 繩文時代の遺構実測図

から縄文時代の所産とした。

**SK02** 下段のMC62とMC63グリッドで検出したが、遺構の一部が調査区外にかかる。

平面プランは、不整な長方形を呈し、長軸2.84~3.23m、短軸1.7~2m、プラン確認面から凹凸があり軟弱な底面までの深さは0.08~0.2mである。長軸方向はN-70°-Wである。西側壁面に長軸1.36m、短軸0.3~0.4m、深さ0.04~0.08mの長形プランを呈する掘り込みが検出されたが、新しい時期の擾乱穴である。埋土は、地山である軽石質火山灰層（所謂シラス）の2次堆積であるが、本土坑を掘り上げた際のものが再流入したものか、東側の郭斜面の崩落によるものか識別できなかった。

遺物は出土しなかったが、検出状況と層位から攜文時代と判断した。

## (2) T-Pit (第9図、図版7)

MC64・MD64のグリッドで、下段の平坦面から現農道に下る斜面に検出したが、斜面に直交するように位置する。平面形は、地山斜面にあわせるように弧を描いており、直線的な長さは3.52mであるが、中軸線上では、半径2.8mの円に一致し、弧の長さは3.68mを計測する。上幅0.2~0.3m、下底幅0.08~0.15m、深さ0.3(西側)~0.6m(東側)である。底面に直径0.3m×短径0.22m、深さ0.15mのビットが1個検出されたが、このT-Pitに伴うか不明である。

## 2 中世～近世

中世～近世と考えられる遺構は柱穴様ビット群、溝状遺構、空堀である。

### (1) 柱穴様ビット群 (第10図、図版6)

MA52・53グリッドで柱穴様ビット7カ所( $P_1 \sim P_7$ )を検出した。SK01土坑をとりまくように検出したので土坑に伴うかと思われたが、本ビットが土坑よりも上位の層から掘り込んでいることから別時期の遺構であると判断した。ビットの配列に規則性は認められなかった。また各ビットに柱痕は認められず、軽石粒を混入する暗褐色土～褐色土がビット内に堆積していた。各ビットの規模・形状・深さは次の通りである。

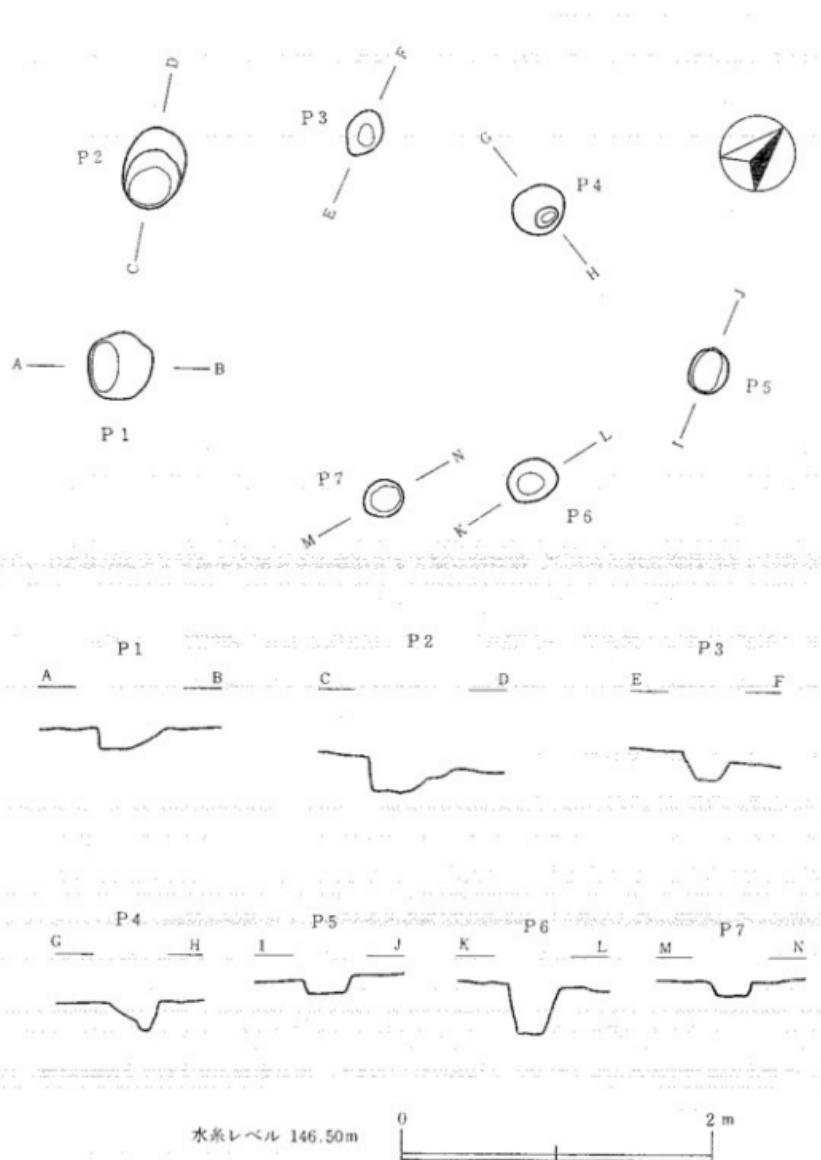
$P_1$ : 0.35×0.35m 略円形 -0.15m	$P_2$ : 0.33×0.44m 楕円形 -0.22m
$P_3$ : 0.18×0.26m 楕円形 -0.17m	$P_4$ : 0.28×0.29m 略円形 -0.21m
$P_5$ : 0.2×0.25m 楕円形 -0.11m	$P_6$ : 0.22×0.29m 楕円形 -0.31m
$P_7$ : 0.19×0.23m 略円形 -0.7m	

### (2) 溝状遺構 (第8図、図版8)

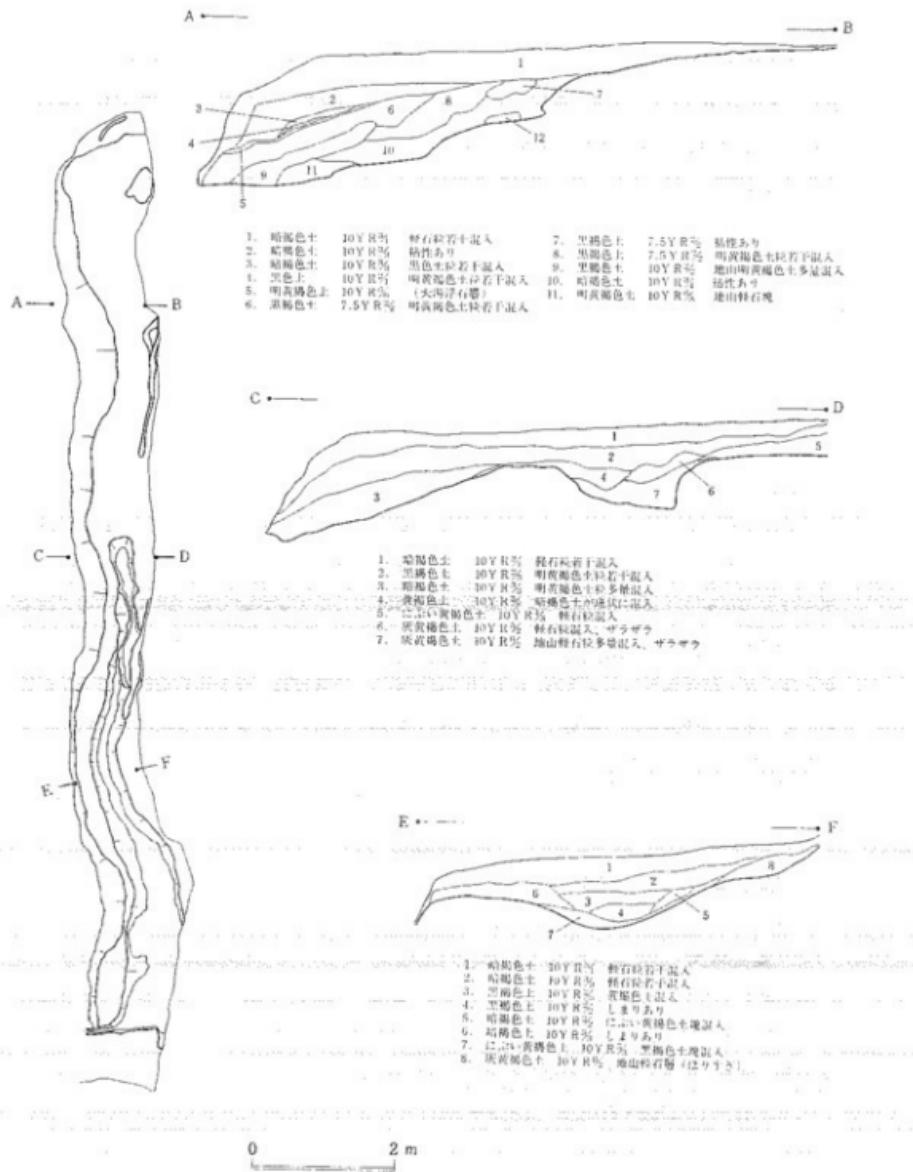
溝状遺構は、下面「帯郭」調査区で3条(SD01~03)検出した。いずれも下面「帯郭」から館跡上面への斜面下縁に位置する。検出時には、上部を斜面から崩落した軽石質火山灰層(所謂シラス)が厚く覆っており、埋土もやや褐色を帯びたシラスであった。

SD01 MC59グリッドに位置し、「く」の字状に屈折している。SD02と重複しているが、SD02より古い。中心線での長さは3.76m、上幅が0.25~0.38m、下底幅が0.11~0.24mを測り、「U」字形の断面を呈する。プラン確認面から下底までの深さは0.2~0.37mであるが、南西側にむかって傾斜している。下底面には、流水によるとと思われるきれいな細砂が薄く堆積していた。遺物は出土しなかった。

SD02 MC56~59、MD56のグリッドではほぼ直線的に検出した。しかし、MC59グリッドでは、斜面上部に風倒木による亀裂があり、斜面が崩壊する危険があるため、半分しか調査



第10図 柱穴様ピット群実測図



第11図 下面「帶郭」斜面及び空堀状遺構内堆積土層断面実測図

ができなかった。中心線での長さは14.2m、上幅が0.16~0.58m、下底幅が0.18~0.25mを測る。横断面は西側がオーバーハングする「V」字状を呈する。MC58グリッド内で長さ2.85mにわたり0.5~0.7mと一段深い個所がみられる。プラン確認面から下底までの深さは0.35~0.7mである。下底面には、きれいな細砂が薄く堆積しており、水が流れたことを示している。遺物は、縄文時代前期の深鉢形土器口縁部破片1点（第13図1）が埋土中から出土した。

S D03 MD50~MD53・ME50のグリッドでは直線的に検出したが、MD52・MD53グリッドでは直上の斜面に風倒木による大きな亀裂がみられ崩壊する危険があるため調査を断念した。空堀状遺構（S D04）と重複するが、S D04より新しい。中心線での長さは12.2m、上幅が0.48~0.8m、下底幅が0.16~0.48mを測り、横断面が「U」字形を呈する。下底面には、きれいな細砂がS D01・S D02よりもやや厚く堆積していた。遺物は出土しなかった。

### （3）空堀状遺構（第8図・第11図、図版8）

空堀状遺構（S D04）は、下面「帶郭」南半区域のMD42~MD47・MD51~MD54・ME42~ME53・ME55・MF42のグリッドで検出した。55ラインから43ラインまでは蛇行しながらもほぼ南北方向に走り、42ラインでは直角に屈折し西側に延びている。空堀状遺構の蛇行プランは、下面「帶郭」の西側の地山地形にはほぼ平行するように検出されている。中心線での長さは61.3mで、上幅は1.6~5.4mを測る。下底幅は1.2~4mを測るが、47ラインから南側では、更に1段深い落ち込みが認められる。プラン確認面から下底までの深さは、0.1~0.2m更に深くなる溝状落ち込みも含め、0.1~0.9mである。下底面は、北側から南側に緩やかに傾斜している。下底面には、南側に行くに従い厚さを増す（0.01~0.20m）が、細砂が堆積していた。遺物は出土しなかった。

## 第2節 出土遺物

### 1 縄文時代

本遺跡から出土した縄文時代の遺物としては、縄文時代前期の深鉢形土器1個体分と土器片28点（うち1点は円盤状土製品に再利用）、縄文時代後期の土器片1点、石器（半円状扁平打製石器、擦石、凹石）13点、剝片2点の計45点である。

#### （1）土器（第12図～第14図、図版9～11）

復原できた土器は、ME59グリッドの9層（黒褐色土層）中からややまとまった状態で出土した1個体（第12図）のみである。胎土に植物纖維を含有し、緩やかな波状を呈する口縁部が大きく外反し、胴部に最大径を有する所謂胴張りのある深鉢形土器である。口縁部文様帶と胴

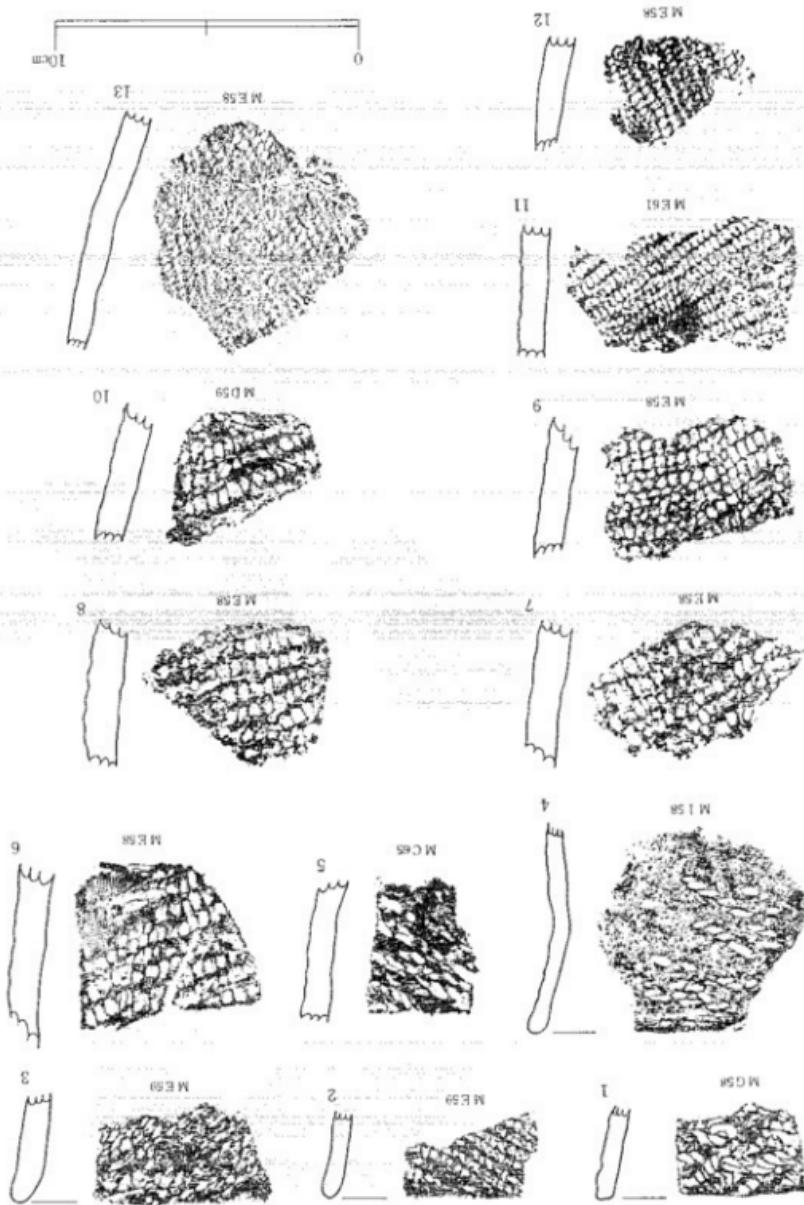


第12図 出土土器実測図

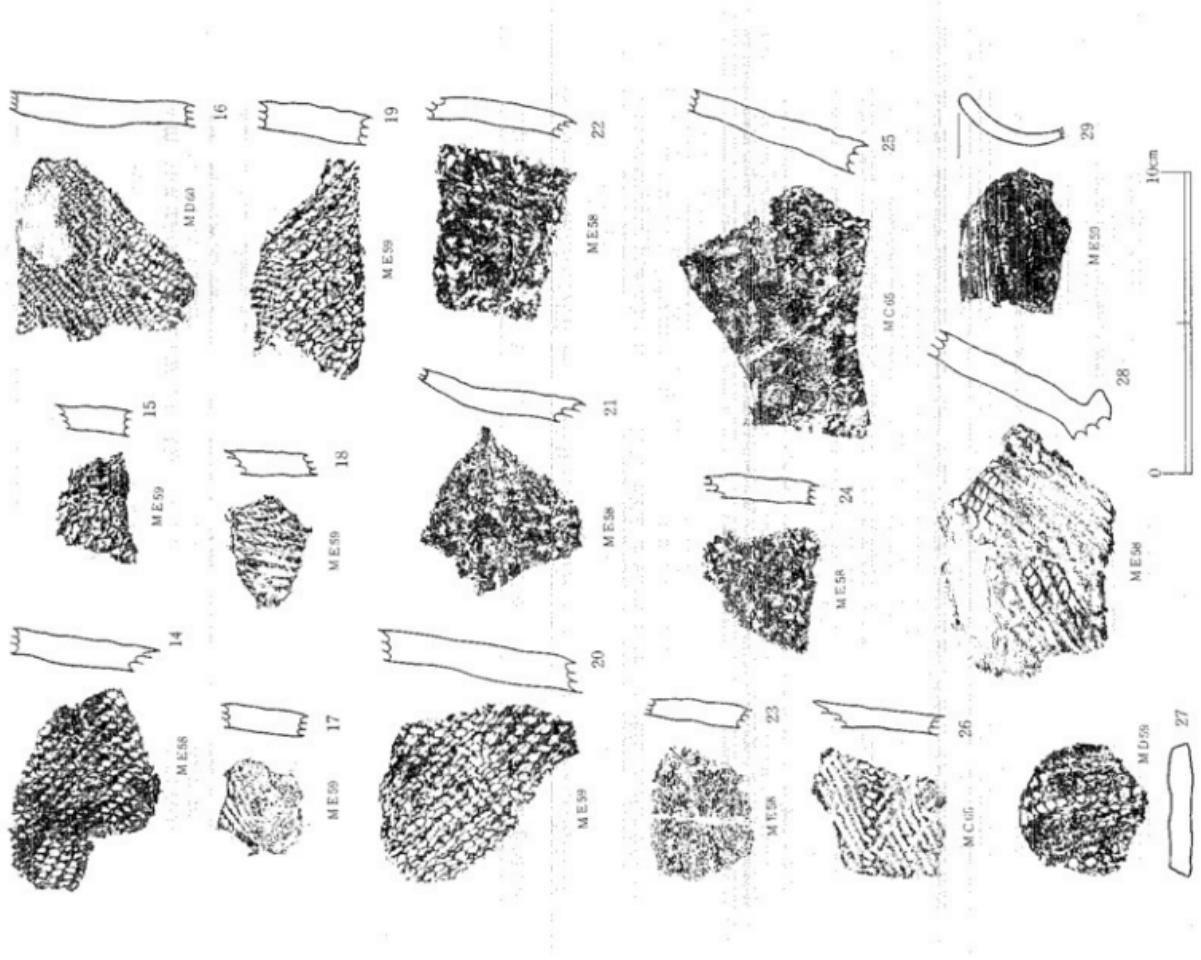
部文様帯の区画として頸部に2条の隆帯を巡らしている。隆帯上には上位と下位の隆帯で逆方向になるように繩状の原体の方向を変えて斜位に押圧し、あたかも土器の頸部に太い糸を2条巻きつけたかのような装飾となっている。隆帯問には、指頭圧痕が認められる。幅広な口縁部には、口縁と平行に綾格文（縦軸結節回転文）が施文されているが、その上に撚糸文が施文されている個所もみられる。胴部文様帯は複節斜繩文（R L R）が施文されているが、胴部中央には綾格文（縦軸結節回転文）が施文され、胴部を上・下に区画している。推定口径38～39cm、現高46cm。

第13図1～13・第14図4～28はいずれも胎土に植物纖維を含有する縄文時代前期の土器片である。施文原体から8類に分類した。

圖18 圖示工具器形圖(1)



新石器時代遺物



第14図 出土土器拓影[2]

## 1類 L R 単節斜縄文が施文された土器 (1・6~10・11・15~17)

1類は原体の太さから更に2分類できる。太い原体1・6~10、細い原体11・15~17

## 2類 L R 単節斜縄文が施文された土器 (12~14・27・28)

## 3類 績格文(結節回転文)が施文された土器 (4・5)

## 4類 摺糸文が施文された土器 (18・19)

## 5類 複節斜縄文が施文された土器 (19・20) (19は2種が施文されている)

## 6類 羽状縄文が施文された土器 (26)

## 7類 無文 (25)

## 8類 不明 (21~24)

このうち、胎土・焼成・器壁の厚さ・原体等から (6~10)、(12・13)、(4・21~25) は同一個体と推定される。27は円盤状土製品として再利用されている。29は縄文時代後期の深鉢形土器の口縁部で、無文で大きく外反している。

## (2) 石器 (第15図~第17図、図版11・12)

本遺跡から出土した石器・剝片は15点であるが、複数の機能を有する石器もある。石器を機能面から分類すると、半円状扁平打製石器2点(3・15)、凹石6点(4~9)、擦石8点(8~15)である。

半円状扁平打製石器 (3・15) 3は、板状節理構造をもつ扁平な礫を、15はやや厚いが扁平な礫を素材とし、1側縁(下辺)部を両面から打ち欠いて刃部を作出している。石質はいずれも安山岩である。

凹石 (4~9) 敷打による凹部が片面にのみのもの(7・8)と両面(4~6)、3面(9)の3種がある。片面・両面のものは扁平な礫を素材としているのに対し、3面のものは、横断面が三角形の礫を使用している。凹部を観察すると、凹部が単一のものは少なく、複数の凹部が連続しているものが多い。石質は7・8が凝灰岩、その他は安山岩である。

擦石 (8~15) 素材の礫の広い面を擦面としているものがほとんどであるが、広い面の他に狭い側縁部も擦面として使用しているものが1点(11)ある。石質は、10が凝灰岩でその他は安山岩である。

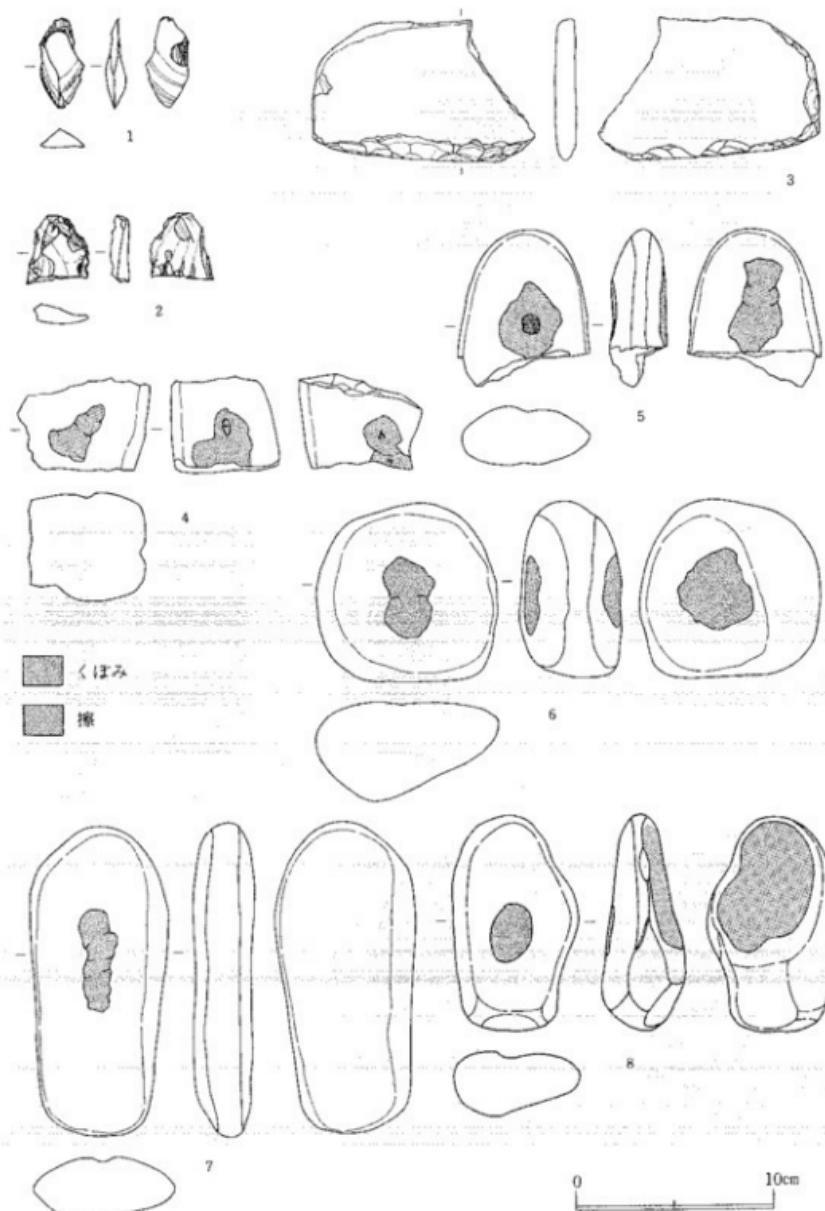
剝片 (1・2) 石質は頁岩である。

## 2 中世から近世以降の遺物

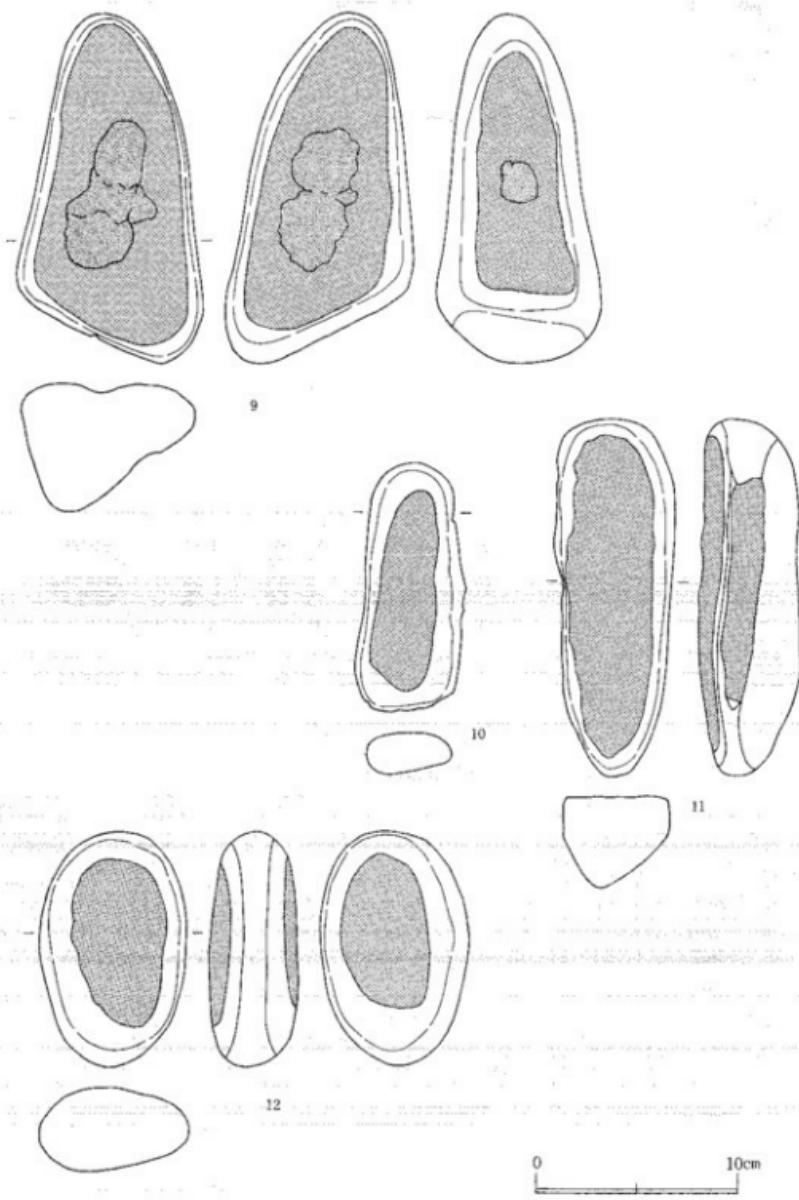
## (1) 陶磁器 (第18図、図版13)

中世から近世以降の陶磁器は4点出土したがいずれも破片である。

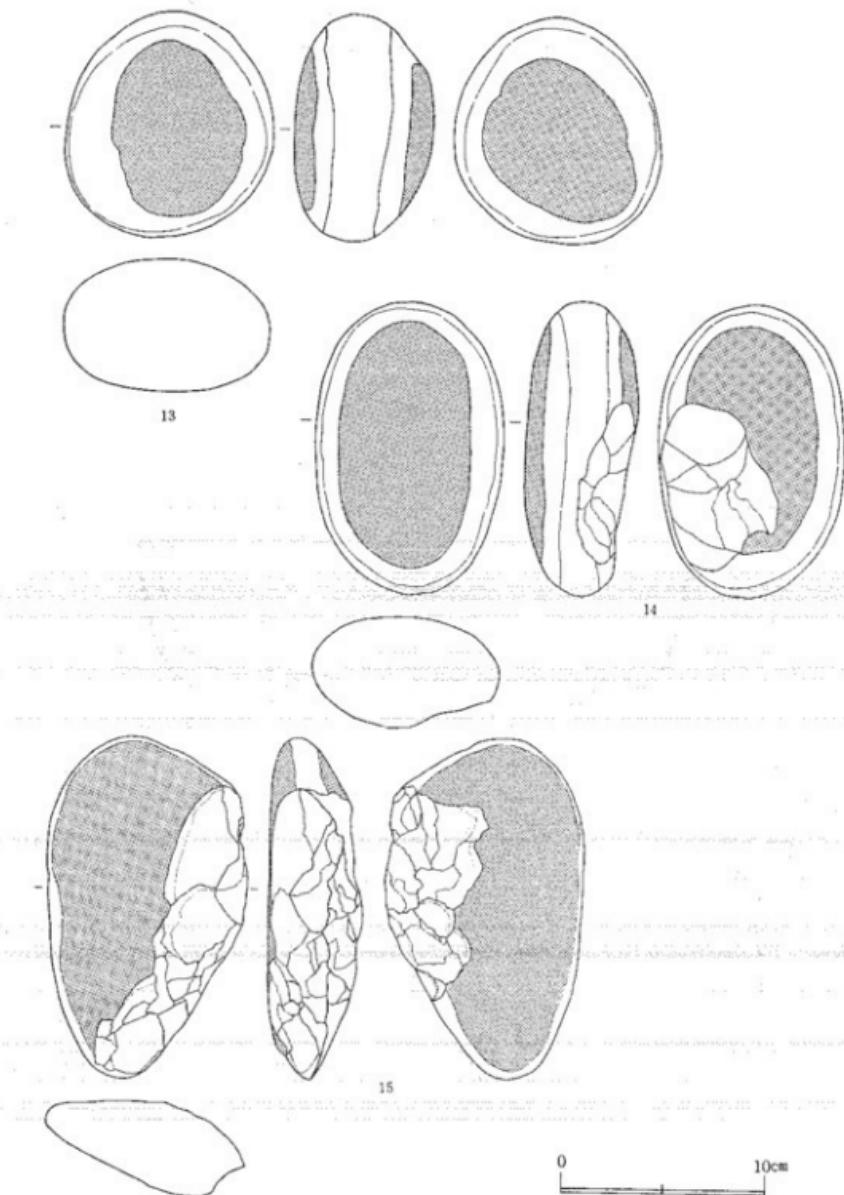
1はMB47グリッドのI層中から出土した美濃灰釉陶器菊皿の底部破片である。生産地側の



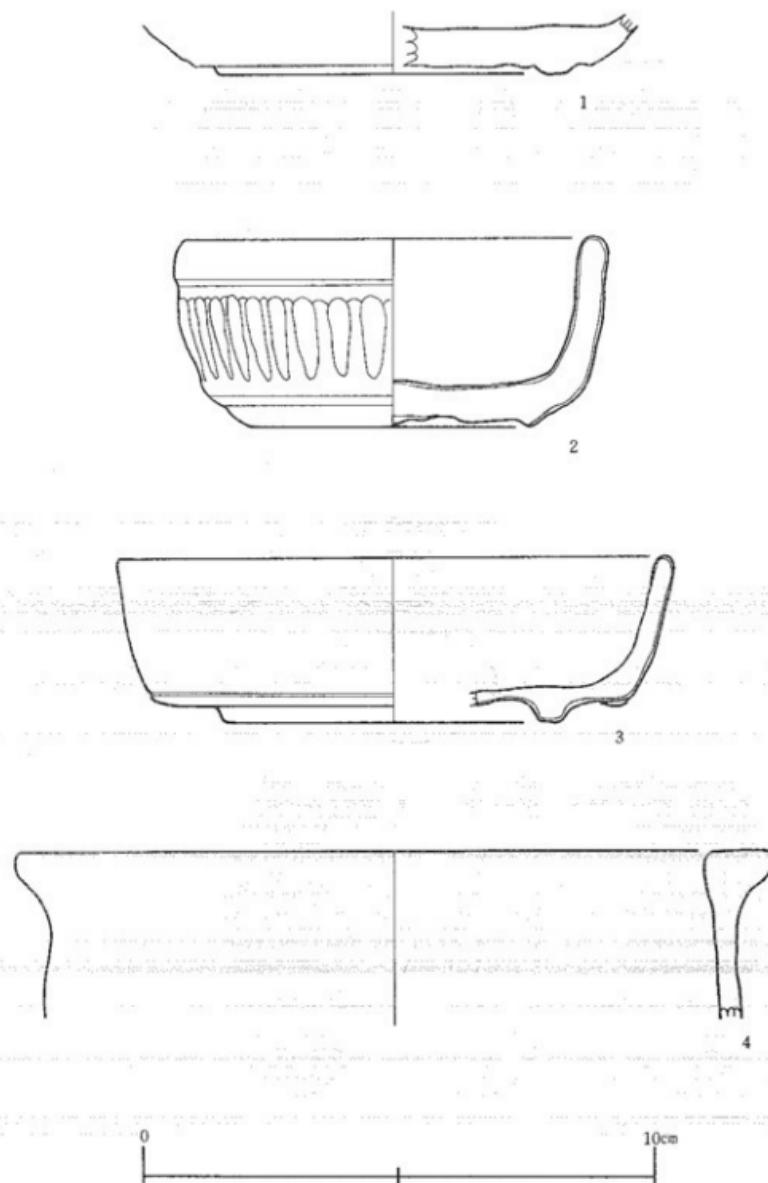
第15図 出土石器・剥片実測図(1)



第16図 出土石器実測図(2)



第17図 出土石器実測図(3)



第18図 出土陶磁器実測図

研究では、大窯3～4期として分類されており、16世紀後半の年代が考えられる。推定底径6.8cm、現高1.2cm。

2は、ME56グリッドのI層中から出土した青磁の香炉である。外面は縦方向に織文があり、底部に蛇の目の無釉部分があるが、その他は淡い緑色がかる青磁釉がかけられている。肥前の陶石に似ているが、それ以外の地域で生産された可能性も高い。江戸時代（18世紀以降）か、それ以降の年代が考えられる。推定口径8.2cm、現高3.7cm、推定底径5.5cm。

3は、MA48グリッドのI層中から出土した灰釉陶器の香炉である。外面は全面、内面は口縁部分のみ施釉しており、中央に煤が付着している。重ね焼きしたため外面の底辺に、下に置かれた陶器の口唇部が付着している。一般に知られる大きな窯場の製品ではないので、東北地方の民窯で近世以降に生産されたと推定される。推定口径10.8cm、現高3.2cm、推定底径6.5cm。

4は、小型の陶器壺の口縁部破片である。口唇だけ無釉で、内外面に褐釉がかけられている。混入物があるため内面と外面で発色が異なる。外面は紫がかる色で、3と同じ産地の可能性がある。推定口径14.8cm、現高3.2cm。

## 第5章　ま　と　め

一つ森館跡の発掘調査は、第I郭の「帯郭」と郭上面の縁辺の800m<sup>2</sup>という狭い範囲であり、中世館跡としての性格について論ずるまでに至らないが、郭下方に帶状に巡る平坦面で溝状遺構と空堀状遺構が確認されたことから、この平坦面を「郭」と呼称することのはずも問題となる。現地形での「帯郭」状平坦面に規模の大きな空堀が検出された例として、青森県大鰐町砂沢平遺跡があげられる。一つ森館跡の他の「帯郭」状平坦面にも空堀が検出される可能性は強い。

一つ森館跡から出土した館跡に関連すると思われる遺物は、美濃灰釉菊皿片1点にすぎない。鹿角地域を含む秋田県北部の米代川流域の中世「城館」・集落遺構等の発掘調査では、施釉・無施釉陶磁器の出土がみられても「土器」の出土がほとんど見られないという特徴があり、中世「城館」・集落における生活用具について追求することには限界がある。

鹿角地域の各館跡・集落遺跡から出土した陶磁器の種類・器種・生産年代・数量は次の通りである。

湯瀬館 13世紀から14世紀にかけての中国蓮弁文青磁碗片1点と16世紀前半の美濃灰釉丸皿2点出土。

小豆沢館跡 16世紀後半の美濃灰釉小皿片1点と16世紀後半から17世紀前半にかけての唐津皿片2点出土。

歌内遺跡 15世紀から16世紀にかけての越前焼甕片7点出土。

北の林II遺跡 16世紀の美濃灰釉丸皿1点出土。

一本杉遺跡 中国福建省で生産されたと思われる11世紀後半から12世紀の白磁碗片3点と、中国福建省同安窯系の12世紀後半から13世紀初頭の青磁碗片1点出土。

柏木森遺跡 16世紀後半の美濃灰釉小皿片2点出土。

花輪館 14世紀後半から15世紀前半にかけての青磁碗片1点、15世紀の青磁皿片1点、16世紀の美濃灰釉皿1点、17世紀中頃の備前染付皿・鉢片各1点、17世紀から18世紀にかけての唐津碗1点の他18世紀から19世紀にかけての備前染付皿・角皿・碗・鉢・徳利片31点出土。

高市向館 白磁碗片3点が出土している、その年代については12世紀から13世紀にかけて生産されたとする鑑定と11世紀後半から12世紀にかけて生産されたとする鑑定の2つがある。

新斗米館 12世紀を中心とした白磁碗片1点、12世紀から14世紀にかけての白磁皿片1点、

14世紀から15世紀にかけての青磁碗片1点、15世紀の雷文のある青磁碗片1点と青磁碗片2点、15世紀の青磁盤片1点、15世紀から16世紀にかけての褐釉鉢片1点、16世紀前半の美濃灰釉皿・皿片8点、16世紀後半の美濃灰釉皿片2点、16世紀染付碗片2点、16世紀末葉から17世紀初頭の志野鉢片1点の他17世紀前半の志野皿片1点出土。

小枝指館 南宋青磁鉢（碗）片2点、南宋龍泉窯青磁片1点、南宋砧青磁片1点、明末青磁鉢片1点、桃山時代青磁片1点・陶器片1点出土。

高瀬館 13世紀末葉から14世紀初頭の鍋蓮弁青磁碗片1点出土。

当麻館跡 14世紀から15世紀の中国白磁皿片1点、15世紀の中国白磁皿片3点、16世紀の白磁皿片5点、14世紀中葉から15世紀の中国青磁碗と盤の破片各1点、15世紀から16世紀にかけての中国青磁皿片2点、15世紀の美濃灰釉皿片2点、16世紀中葉の美濃灰釉皿片3点と壺片2点、16世紀後半の美濃鐵釉碗片1点、16世紀の国産染付皿片6点、17世紀の国産染付大皿片1点、16世紀の信楽壺片1点が出土。

一つ森館 16世紀後半の美濃灰釉皿底部破片1点が出土。

以上のように、鹿角地域から出土した陶磁器を概観すると、年代が最も古いのは一本杉遺跡と高市向館から出土した11世紀後半から12世紀にかけての中国白磁碗片である。陶磁器の生産年代と使用後の廃棄年代との間にはズレがあることと、伝世の問題も加わることから陶磁器の年代が即遺跡の年代とするには困難であるが、一応の目安とすることは可能である。

陶磁器が日本海から米代川を遡上して搬入されたのか、あるいは太平洋側内陸部を運搬され、鹿角地域にもたらされたのか検討を加えなければならないが、昭和30年に調査された小枝指館遺跡の報告にある『當時東北地方北部の、七箇のような奥まったところまで、中国青磁が相当量使われたらしいことは、われわれの発掘の結果はじめて知られた事実で、このことはこの方面における室町時代前後の商業や交通の状態、また生活文化などを考察するうえに重要な示唆を与える』という指摘については、なお資料の増加を待たなければならない。

縄文時代の遺物のうち土器は、前期中葉の円筒下層b式土器様式の範疇に入るものと、後期のものである。石器も2点の半円状扁平打製石器は円筒下層式土器に伴出する特徴的なものである。「帶郭」の西側下方に円筒土器特有の捨て場が存在する可能性がある。

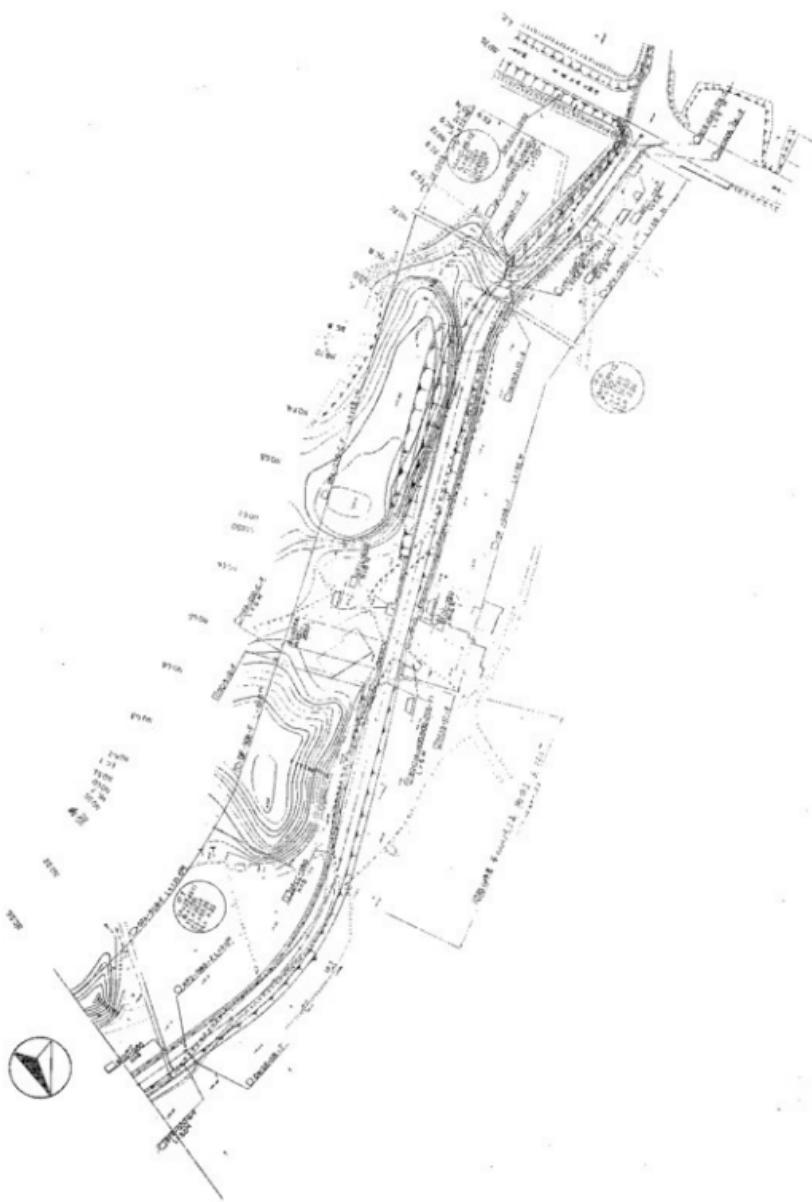
## 参考文献

秋田県教育委員会 「湯瀬館跡」 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書1』 秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56)年

## 第5章　まとめ

- 秋田県教育委員会 「歌内遺跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書II』 秋田県文化財調査報告書第88集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 「北の林II遺跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書IV』 秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 「小豆沢跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書IV』 秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 「一本杉遺跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書VI』 秋田県文化財調査報告書第99集 1983(昭和58)年
- 秋田県教育委員会 「柏木森遺跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書VII』 秋田県文化財調査報告書第105集 1984(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 「乳牛平遺跡」 『東北縱貫自動車道発掘調査報告書VIII』 秋田県文化財調査報告書第107集 1984(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 「中田表遺跡」 『中田表遺跡・重兵衛台I遺跡・重兵衛台II遺跡・根洗湯遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第74集 1980(昭和55)年
- 鹿角市教育委員会 『新斗米館跡 -鹿角市新斗米館跡第II次発掘調査報告書-』 鹿角市文化財調査資料16 1981(昭和56)年
- 鹿角市教育委員会 『高市向館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料22 1982(昭和57)年
- 鹿角市教育委員会 『花輪館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料27 1984(昭和59)年
- 鹿角市教育委員会 『花輪館跡発掘調査報告書(2)』 鹿角市文化財調査報告書34 1988(昭和63)年
- 鹿角市教育委員会 『当麻館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査報告書37 1989(平成元)年

第19圖 線路工事設計圖





昭和20年代撮影



一ツ森館跡南瞰（南側から）



一ツ森館跡遠景（北側から）



発掘前の下段「帯郭」



枝葉除去後の下段「帯郭」

図版四  
遺跡遠景（二）



発掘前の上面部



枝葉除去後の上面部



上面部完掘全景（南側から）



上面部SK01土坑プラン確認状況（西側から）

図版六  
遺構完掘状況（二）



上面部 S K01土坑・柱穴様ピット群完掘状況



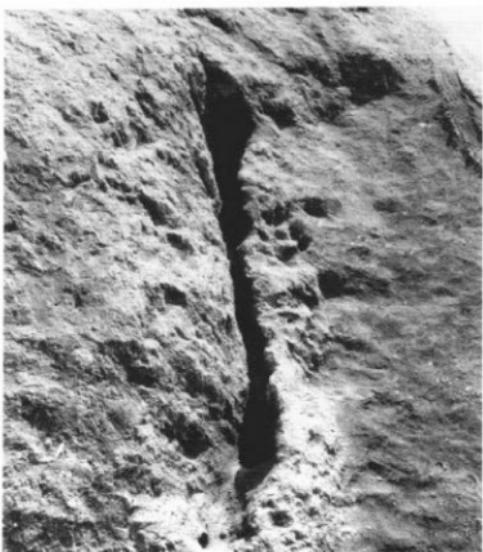
下段「帶郭」土層堆積状況

図版七 遺構完掘状況（三）



下段斜面SKT01 T-Pit 完掘状況（北側から）

同（北東側から  
俯瞰）



圖版八 遺構完掘状況（四）



下段 S D01・02溝状遺構完掘状況（北東側から）



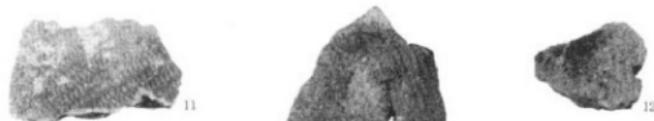
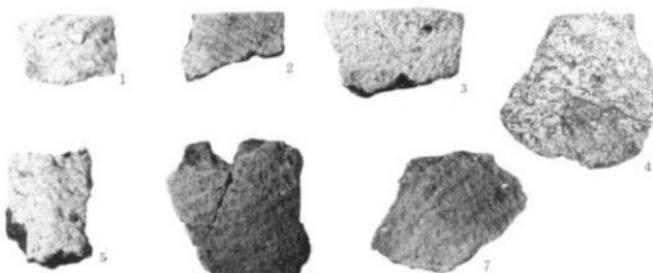
下段 S D04空堀状遺構完掘状況（北側から）

图版九 出土遗物（二）

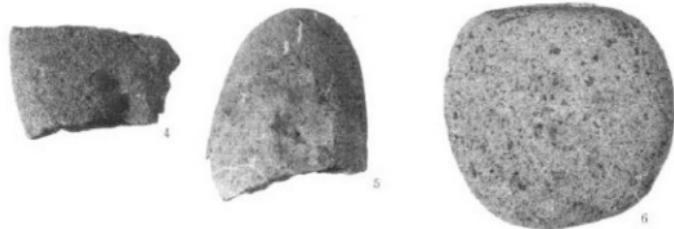
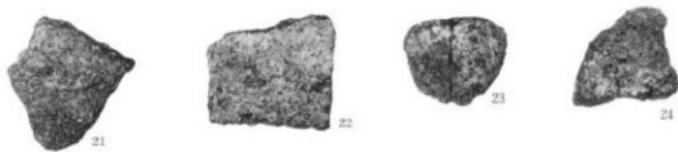


第12图对应

圖版十 出土遺物（二）



圖版十一 出土遺物 (三)



圖版十二 出土遺物（四）



圖版十三  
出土遺物（五）

